

《ニケア・コンスタンチノーブル信条》

わたしは信じます。唯一の神、全能の父、天と地、見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主を。わたしは信じます。唯一の主イエス・キリストを。主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られることなく生まれ、父と一体。すべては主によって造られました。主は、わたしたち人類のため、わたしたちの救いのために天からくだり、聖霊によって、おとめマリアよりからだを受け、人となりました。ポンティオ・ピラトのもとで、わたしたちのために十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおりの三日目に復活し、天に昇り、父の右の座に着いておられます。主は、生者(せいしゃ)と死者を裁くために栄光のうちに再び来られます。その国は終わることがありません。

私は信じます。主であり、いのちの与え主である聖霊を。聖霊は、父と子から出て、父と子とともに礼拝され、栄光を受け、また預言者をとおして語られました。

わたしは、聖なる、普遍の、使徒的、唯一の教会を信じます。罪のゆるしをもたらず唯一の洗礼を認め、死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。アーメン。

21 世紀の信仰と教会の再建のために（その 1）

——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——

カトリック名古屋教区 平針教会典礼委員 多田哲也

昨年（2018 年）私の所属教会であるカトリック名古屋教区 平針(ひらばり)教会で、主日のミサの信仰宣言として、使徒信条に変えてニケア・コンスタンチノーブル信条が唱えられることになりました。そのことについて、何人かの信徒の方々から、「長すぎる」、「ごちゃごちゃしすぎ」、「くどい」、「理屈っぽい」、「なぜもとの使徒信条ではいけないのか」といった感想が寄せられました。これはある意味、もっともなことだと思われました。しかしこういった感想が、単に慣れていないことからくるのであればいいのですが、はじめからこのニケア・コンスタンチノーブル信条に対してマイナスイメージを持ったまま、それがずっと続くようであれば、典礼上の効果としてあまりよろしくないと思いました。それで、この件について、主任司祭である神父様のミサ中の説教での説明、「教会だより」での説明に加えて、私も典礼委員の一人として補足説明をしなければいけないと感じ、以下のような文章を書いて信徒の皆さんに読んでいただくことになりました。そういうわけで、初めは単に、このニケア・コンスタンチノーブル信条が皆さんに受け入れられるように、という単純な目的から文章を書き始めたのですが、書き進めるに従って、少し違った考えが思い浮かぶようになりました。つまり、この信条が平針教会の皆さんに受

け入れられるかどうか、ということを超えて、この機会に、私自身の信仰も含めてカトリック教会の信徒の皆さんの信仰の成長のために、そして教会自体の再建のために、このニケア・コンスタンチノーブル信条それ自体と、それについての色々と考えを巡らしたものである私の文章が、何か貢献できることがあるかもしれない、と思い始めたのです。ですのでこの文章は単に客観的なニケア・コンスタンチノーブル信条についての教義的な解説、というだけではなく、この信条を入り口、あるいは手がかりとした、私個人の、信仰について、また教会についての「分かち合い」のようなものである、ということをお分かりいただいた上でお読みください。

さてニケア・コンスタンチノーブル信条についてですが、まずはじめに申し上げなければいけないのは、(1) この信条は第二バチカン公会議以前のカトリック教会のラテン語のミサにおいては何百年にもわたって唯一の信仰宣言であり続けたものであるということです。(なので過去の有名な作曲家による「ミサ曲」、例えばカトリック信者であったベートーベンによる「荘厳ミサ」、そしてプロテスタントであったバッハによる有名な「ロ短調ミサ」でさえも、すべてこのニケア・コンスタンチノーブル信条の歌詞で作曲されています。)そして(2) こちらのほうがより大事ですが、第二バチカン公会議以降、ラテン語に替わって各国語のミサが行われるようになったあとでも、日本以外では、世界中の圧倒的多数の国々のカトリック教会において、今現在においても、このニケア・コンスタンチノーブル信条のほうが、主流として信仰宣言として用いられ続けているということです。世界中のほかの国々の教会で普通に唱えられ続けているニケア・コンスタンチノーブル信条が、なぜ日本の教会においては、現状のようにほとんど無視されるようになったのか、その辺の事情は私にはわかりませんが、「世界中どこでもつながっている普遍的な(=カトリック)教会」という理念からすると、これまで日本の教会が、世界中のカトリック信者が唱えている信仰宣言に背を向けている状態なのは、(あくまでも私個人の感想ですが) やや残念な気がいたします。皆様はこのことについてどう思われるのでしょうか。もちろん人間は誰でも、今まで慣れてきたものに愛着があり、新しい耳慣れないものには拒絶感を抱くのは自然なことです。ですから日本の教会の多くの方々が、今までなじみのなかったニケア・コンスタンチノーブル信条に違和感を抱くのは当然なことだと思います。でもここでご理解いただきたいのは、このニケア・コンスタンチノーブル信条は、何か特殊なもの、変なものなどではなくて、世界中に広がるカトリック教会において、現在においても信仰宣言として主流であり標準になっている、ということです。

でもいくら世界中で使われているといっても、それだけで「長い」、「くどい」といったマイナスイメージは、簡単に払拭できるものではないかもしれません。そこで、そういったマイナスイメージを取り除くために、このニケア・コンスタンチノーブル信条のどこがすぐれていて、なぜ世界中で使われているかについて考えてみたいと思います。まずニケア・コンスタンチノーブル信条の特徴は、三位一体の教義を中心に、豊かな神学的内容を持っていることです。このことが、逆に取りようによっては、「ごちゃごちゃしている」、「理屈っぽい」ということにもなるかと思われまます。しかし私たちカトリック信者にとって、自分たちが信じている神様についての神学的理解を深め、それをことばにして唱えることはとても大事なことでないでしょうか。例えば「コロサイの信徒への手紙」には「神をますます深く知るように。」(コロサイ1・10)、また「知恵を尽くして互いに教え、論し合いなさい。」(コロサイ3・16)とあります。私たちカトリック信者は、自分たちが信じている神様についてより深く知ろうと努める必要はない、とは言われていないのです。

第二バチカン公会議以前のカトリック教会においては、何世紀にもわたって世界中でミサは基本的にラテン語のみで行われていました。このことの背後にはさまざまな理由、歴史的な経緯などがあって、いちがいに否定的なこととみなすべきではないと思います。しかし、このことからうかがえることは、公会議以前の教会においては、一般信徒たちが、ミサ中の典礼で使われている言葉の意味を理解することはそれほど重要なことではない、と事実上考えられていた、ということです。そういったところにもあらわれていると思いますが、以前の教会においては、一般信徒が教えの内容をより深く理解することについては、やや軽視する傾向があったと思います。それではいけない、そういったことはあらためよう、もっと一般信徒が教会の教えの内容を深く理解していけるようにしよう、という考えが、第二バチカン公会議を契機に、各国語でミサを行うことになったひとつの理由であると思います。しかしながら何世紀にもわたって続いてきたカトリック教会の体質はなかなか簡単に変わるものではないようで、「一般信徒は教えの内容を深く理解する必要はなく、ただ司祭によってほどこされる秘跡を受けていればそれでいい」、という雰囲気、残念ながら教会の中には今でも根強く残っているように感じます。

私の個人的体験ですが、高校生のときに洗礼を受け、その流れでカトリック系の大学に行きたかったので、上智大学に進学しましたが、その時少しショックを受けたのは、大学で未信者の友人から「カトリックの信者って、自分が何を信じているかについて、全然何も知らないっていうか、わかってない人が多いよね」と言われたことでした。私自身もまだ洗礼を受けて間もないころだったので、お世辞にも神学の知識が豊富とはいえ、何も言い返せなかったのは今でも残念です。それはともかく、世間ではカトリック信者というものがそういうイメージを持たれているのであれば、もしかしたらそれなりの根拠があるのかもしれませんが。それならば少しでも私たちカトリック信者は、せめて最低限必要な神学的知識を身につけるべきではないでしょうか。「キリストって、神の子っていうけど、どういう意味なの？神様なの、それとも普通の人間なの？」と聞かれたとき、カトリック信者として「さあ——？？よくわからない。」としか言えないよりは、「キリストはね、神様である方が人間になられたっていうこと、つまり神であると同時に人間でもある方なんだよ。」と自信を持って言えるほうがいいと思うのですが、いかがでしょうか。もしそのようにちゃんと答えられれば、もしかしたらそのことが宣教につながっていくかもしれません。そしてそう言えるようになるためには、ニケア・コンスタンチノーブル信条はとても役に立つと思います。なぜなら、使徒信条とは違って、ニケア・コンスタンチノーブル信条では、イエス・キリストは「まことの神よりのまことの神」、つまり「まことの神である御父から生まれた、まことの神である御子である」とはっきり述べられているからです。

以上は対人的なことですが、他方、私たち信者の内面的信仰の成長にとっても、ニケア・コンスタンチノーブル信条の神学的豊かさは、とてもすばらしい働きをしてくれると思います。例えば御子の受肉（神であるキリストが人となられたこと）についてですが、C. S. ルイス（映画化もされた有名な児童文学『ナルニア国物語』の作者）は次のように言っています。「第二位格の神なる御子がみずから人間となり、現実の人間として、つまり特定の背丈、特定の髪の色を持ち、特定の言語を話し、何キログラムかの体重を持ったほんとうの人間として、この世に生まれた。全知にして全宇宙を創造したもうた永遠的存在者が人間になったばかりでなく、（その前に）乳児となり、さらにその前には女の肉体の中の胎児となったのである。それがどんなことか知りたかったら、あなたがたは自分がナメクジやカニになった場合を想像

すればよいだろう。」(柳生直行訳『キリスト教の精髓』新教出版社) つまり全能永遠の神御自身が、御自分より無限におとるものである人間にあえてなられたということ、また想像を絶するような侮辱と肉体的苦しみを引き受けられて十字架につけられたということ、そしてそれがすべて私たち人類への愛のためだったということ、このことを思うときに、私たちはキリストへの愛を深めずにはいられないのではないのでしょうか。リジューの聖テレジアは言いました。「おお、イエズス！感謝のあまり、私にこういわせてくださいませ、あなたの愛はおろかじみてさえいると、いわせてくださいませ……。このおろかさを前にして、どうして私の心が、あなたのほうに飛んで行かずにはいられましょう？」(『小さき聖テレジア自叙伝』ドン・ボスコ社) そしてこのキリストの、おろかに見えるほどの私たちへのすばらしい愛を理解するためには、キリストが御父と同一本質の神であること、つまり「神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神」であることを、私たちが心から信じるのが前提となります。

ニケア・コンスタンチノーブル信条は、4世紀の異端であるアリウス(アレイオス)派の考え「キリストは神ではない」に対して、正統信仰である「キリストは御父と同一本質な神である」をはっきりと述べたものです。そのことがなぜそんなに大事かということ、「キリストは神ではない」という考えは、上に述べたようなキリストの人類への愛の大きさを理解することも、私たちのキリストへの愛も、すべて損なってしまうからです。そしてもちろん、キリストの受難と十字架の死と復活による私たちの罪のあがないもナンセンスだということになってしまうからです。ある神父様は、「キリストは人間であって神ではない、とどこかで思っている神学者、司祭、信徒も増えている。何となくあいまいな空気が生まれているのは確かだ。」とおっしゃっていました。現代版のアリウス派が広がってきている、ということでしょうか。そしてもしかしたらそのことが、最近のカトリック教会の力のなさ(司祭、修道者への召し出しの減少、成人洗礼の減少、幼児洗礼の人たちがどんどん教会を離れて行くこと、などなど)に表れているのではないのでしょうか。もしある人が、キリストが神であることを信じられないならば、キリストの愛の大きさも理解できないし、キリストを愛することもできないし、キリストの救いの業も信じられないでしょうから、信仰が弱くなり、最終的には教会を離れて行くのは当然でしょう。だから今のカトリック教会にはいろいろな問題が山積していますが、根本は私たちの信仰自体が揺らいでいることから来ているように思われます。いろいろな問題に対してはいろいろな対策を講じる必要があると思いますが、まずその一つとしてこのニケア・コンスタンチノーブル信条を唱えることで、「御子イエス・キリストは神である」という私たちの正しい信仰を再確認して、神への愛を強めることから始めるのはいかがでしょうか。

ここまで私の説明を読んでいただいて、ニケア・コンスタンチノーブル信条にだけあって、使徒信条にはない、御子に関する部分「主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られることなく生まれ、父と一体。すべては主によって造られました。」についてどう感じられるでしょうか。私の今回の説明は「御子キリストは御父と同一本質の神である」ということ、つまり主キリストは「神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神」である、の部分にスペースの都合上限定されていますが、それだけでも大変豊かな教えが含まれていることがわかっていただけたでしょうか。そのほかにも、このニケア・コンスタンチノーブル信条には、御父が「見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主」であること、キリストが「すべてに先立って」父より生まれたこと、キリストが「造られた(=創造された)」ものではなく、御父から「生まれた」ものであること、また聖霊が「主であり、いのちの与え主」であり、「父と子から出て、父と子とともに礼拝

され」ること、私たちの教会は「聖なる、普遍の、使徒的、唯一」の教会であること、などなど、深い豊かな神学的な内容を持ち、かつ使徒信条には含まれていない箇所がありますが、これらについての説明は次回以降にゆずりたいと思います。

(今回のこの文の執筆に当たって、カトリック東京カテドラル関口教会、大阪教区のカトリック甲子園教会、福岡教区のカトリック高宮教会など、信仰宣言にニケア・コンスタンチノーブル信条を採用しているらっしゃる教会のウェブサイトを参考にさせていただきました。御礼を申し上げます。またこの文章は当教会の主任司祭であるインセン神父様に目を通していただいて認可を受けているものです。)

21 世紀の信仰と教会の再建のために（その 2）

——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——

カトリック名古屋教区 平針教会典礼委員 多田哲也

前回のものに引き続いて、ニケア・コンスタンチノーブル信条の中で、使徒信条には含まれていない部分についての説明をさせていただきたいと思います。信条の中で述べられている順番はこの際考慮せずに、今回は「いのちの与え主である聖霊」という箇所について考えてみたいと思います。というのもこの箇所は、現代特有のいろいろな問題が山積しているカトリック教会の中で生きる私たちにとって、とりわけ重要な部分だと思われるからです。

使徒信条では、聖霊については、「聖霊を信じ、・・・」とあるだけで、聖霊がどのような方であるかについてはまったく触れられていません。それに対して、ニケア・コンスタンチノーブル信条においては、聖霊については、御子イエス・キリストについての箇所ほどではありませんが、割合くわしく述べられています。まず「わたしは信じます。主であり、いのちの与え主である聖霊を。」とされています。この中で、聖霊が「主であり」、またこのあとで出てくるように「父と子とともに礼拝され」ということは、明らかに聖霊が御父と御子と同一本質の神であることを示しています。なぜなら私たちにとって「主であり」、「礼拝される」方は神だけだからです。では次の箇所の「いのちの与え主」とはどういう意味なのでしょう。神である方が「いのちの与え主」であることは、当たり前といえば当たり前なのですが、ここでは具体的にはどういう意味で「いのちの与え主」と言われているのか、ややわかりにくいとは思いませんか？これが英語版で見ても「the giver of life（いのちを与える方）」とあり、日本語のものと同様に、同じようにややわかりにくい印象を受けます。ではカトリック教会で伝統的に何百年も使われてきたラテン語版の信条ではどうでしょうか。ラテン語ではこの「いのちの与え主」にあたる部分は、「vivificans（ヴィヴィフィカンス）」という一単語で表されています。（実際の信条の文中では「いのちの与え主を（信じます）」と続く形なので、「vivificantem（ヴィヴィフィカンテム）」という変化形になっています。）このヴィヴィフィカンス（とても言いにくいですね(笑)）とはどういう意味なのでしょう。これは「活気づけるもの」、「活性化させるもの」、「生き生きとさせるもの」、ひいては「魂を吹き込むもの」、「いのちを吹き込むもの」といったことを表します。

このヴィヴィフィカンスという言葉についてもっと具体的なイメージを持っていただくために、やや話がそれるように思われるかもしれませんが、少し別の点から考えて見たいと思います。例えば皆さんよくご存知のように、ふつう日本語では「アニメ」と略されているアニメーション（animation）というものがありますね。今や日本がその水準の高さで世界に誇るサブカルチャーとして、ヨーロッパやアメリカも含む世界中の若者たちから憧れを持って見られているものですね。（ジャパニメーションという言葉もあるほどですね。）皆さんはこのアニメーションという言葉のもともとの意味をご存知でしょうか。これもラテン語からきた単語ですが、アニマ（anima）というのは「魂」、「霊」、「生命力」という意味で、これを持っていないとされた植物などは死んでいるような状態にあって動けないわけですが、これを神様から吹き込まれて生きるものとなった動物（アニマル animal）は動くことができる、とラテン語を

しゃべっていた古代ローマ人たちは考えたわけです。ところで絵というものは、いくらリアルに描かれているとしても、植物のように死んだ状態にあって動かないものですが、その絵が、あたかも魔法でアニマ（魂、生命力）を与えられたかのように、動くようになったのですから、これを初めて見た人たちはとても驚いたことでしょう。この本来死んでいるかのようなものである動かない絵に、アニマ（anima）を吹き込んで、生きて動くものにするのをアニメーション（animation）というわけです。ここで話を戻しますが、聖霊が「いのちの与え主（ヴィヴィフィカンス、vivificans）＊」である、というのは、この「アニメーション」のように、死んで動かなくなっているかのようなものに、「魂」、「いのち」を吹き込んで、「生きて動く」ものにしてくださる方である、ということを表します。

繰り返しますが、アニメーションが、本来死んでいるかのように動かないものである絵に「魂」、「いのち」を吹き込んで、「生きて動く」ものにするのと同じように、聖霊は、やはり死んで動かなくなっているものに「魂」、「いのち」を吹き込んで、「生きて動く」ものになさる方である、というイメージは、聖霊という方を理解する上でとても重要です。旧約聖書の中の「エゼキエル書」には次のような箇所があります。「わたしは主の霊によって連れ出され、ある谷の真ん中に降ろされた。そこは骨でいっぱいであった。・・・また見るとそれらは甚だしく枯れていた。そのとき、主はわたしに言われた。『人の子よ、これらの骨は生き返ることができるか。』わたしは答えた。『主なる神よ、あなたのみがご存じです。』そこで、主はわたしに言われた。『これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。・・・見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る。・・・』・・・すると、霊が彼らの中に入り、彼らは生き返って自分の足で立った。彼らは非常に大きな集団となった。」

（エゼキエル37）エゼキエルは、エルサレムがバビロン軍によって陥落し、イスラエルが滅亡し、すべての希望が絶たれてしまったかのような主の民の状態を、「枯れた骨」にたとえました。そしてそれと同時に、その「枯れた骨」が「主の霊」によって再び生きるものとなることを預言しました。この時代にはもちろん、主である「聖霊」の存在はまだ啓示されていませんでしたが、ここでエゼキエルが語っているのが「いのちの与え主」つまり「死んでいるものに魂を吹き込んで生きるものにしてくださる方」である聖霊なのは明らかです。

二千年にもわたるカトリック教会の歴史の中で、何度も何度も教会自体が「枯れた骨」のようになってしまったことがあることは、皆さんよくご存知のことと思います。それは時にはすさまじい迫害によってでしたし（私たち平針教会の保護の聖人である日本二十六聖人はそのことの証人です）、そして時には平和からくる墮落、腐敗によってでした。ある意味、迫害の時代に信仰を守り抜くことと同じぐらい、あるいはそれ以上に、何の迫害もない平和の中で信仰を守りぬくことは難しいことなかもしれません。教皇聖ヨハネ・パウロ二世を出したポーランドのカトリック教会は、共産主義政権による迫害の時代は、実に信仰において熱心だったそうですが、共産主義政権が崩壊し、迫害がやんだ今、皮肉なことにかつての熱心さは失われつつあるそうです。そして二十六聖人の時代とは違って何の迫害もない、今の日本の教会も、前回申し上げたように、決して力にあふれた状態とは言えないのではないのでしょうか。私たち自身の信仰が、少しずつ弱く、生ぬるいもの（黙示録3・16）になって来ているところがあるのではないのでしょうか。少なくとも私個人は自分の信仰が実に生ぬるいもので、主に対する誠実さを欠いた、論外なものであったことを気づかされつつある今日この頃です。そしてそういう信仰の状態、5人の子供たちを育ててきたことについては、後悔してもしきれない残念さと、子供たちに対する申し訳なさでいっぱいです。それでも私は、ニケア・コンスタンチノーブル信条の一部である「わたしは信じます。主であ

り、いのちの与え主である聖霊を。」と唱えることによって、聖霊は、死んでいるものである今の私を生きるものにしてくださる唯一の希望である、と信じることができるのです。教会のことに話をもどしますと、今の日本の教会が決して理想的な状態ではない、とどこかで感じてはいるけれども、だからといってそのことに対して、自分は何をすればいいのか、何ができるのかわからない、と思っている方が多いらっしゃったら、おすすめていたことがあります。それはこのニケア・コンスタンチノーブル信条の「わたしは信じます。主であり、いのちの与え主である聖霊を。」を唱えることで、本当に聖霊が、死んでいるものを生きるものに変えてくださる方であることを心から信じ、「聖霊来て下さい。そして私が愛するカトリック教会を、死んだものではなく生きるものに変えてください。」と祈り続けることです。聖霊は私たちのそうした祈りを、決してしりぞけることはない私は信じています。

以上は「教会」にとって、聖霊が唯一の「いのちの与え主」である、ということについてですが、次に聖霊は私たち一人ひとりの信仰のあり方にとっても、唯一の「いのちの与え主」である、ということについて考えてみたいと思います。聖パウロは「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えないのです。」(一コリント12・3)と言いました。自分で口に出して「イエスは主です」と言うことは、単にある文字を音声にする、ということ以上の意味があります。「イエスは主です」と私たちが言う時に、そこに込められているのは、私たち自身の主についての「確信」と、私たちはそのことの証人になりますという「決意」と、その二つのことにもなう私たちの主に対する「愛」です。そしてそれら全て、「確信」と「決意」と「愛」を私たちのうちに起こさせてくださるのは、聖霊のちからです。それが聖パウロのことばの意味するところです。私たちはミサにあずかる時、たくさんの祈りの言葉を司祭の口から聞き、また私たち自身も祈りの言葉を唱えます。また聖書からの御言葉を聞きます。しかしそれらの言葉が、ここで聖パウロが言う「イエスは主です」とは違って、単に呪文のような音声だけのものになり、私たちの心の中に何も響くものがないという時はないでしょうか。少なくとも私自身には、そういうことがよくあります。そういった時、残念ながらそれらの言葉は私たちにとって「死んで動かないもの」になっているといえるでしょう。ミサで唱えられるそういった祈りの言葉や聖書の御言葉が、聖霊のはたらきによって書かれたものであると、私たちカトリック信者は信じています。でもそのことは、ミサの祈りの言葉や聖書の御言葉が、私たちの信仰のあり方、状態とは関係なく、自動的に私たちの心に入って何かを起こしてくれる、ということの意味しません。私たちのこころには、聖霊のはたらきを邪魔するものがたくさん詰まっています。そういったもののせいで「死んで動かないもの」になっているのは、私たちのこころの方なのです。それを「生きて動くもの」にしてくださるのは、「いのちの与え主」である聖霊しかありません。私たちのこころが「生きたもの」になって、ミサの祈りの言葉や聖書の御言葉を「生きたもの」として受け取ることができるようになるのは、「いのちの与え主」である聖霊のちからによるのです。そして私たちの主に対する信仰を「死んだもの」ではなく、「生きたもの」にしてくださるのも、聖霊のちからなのです。そして私たちの信仰が、本当に「生きたもの」になることは、どうしても私たちにとって必要なことです。ではどのようにすれば、その聖霊のちからが私たちの内にはたらかれるようになるのか、それは画一的なものではなくて、人によってさまざまだと思いますが、もしここまで読まれてきて、「聖霊来て下さい。私の信仰を『死んで動かないもの』ではなく『生きて動くもの』にしてください」と自然に祈りたくなつた方がいらっしゃるとすれば、すでに聖霊はその方のうちにはたらいていらっしゃると言えるでしょう。なぜなら聖霊ご自身を願い求める望みそれ自体が、実は聖霊が与えてくださるものだからです。そして主イエス・キリストがおっしゃったように、かならず「天の父は求めるも

のに聖霊を与えてくださる」(ルカ 11・13) のです。

上で述べた聖パウロが言うところの「イエスは主である」と同様に、ニケア・コンスタンチノーブル信条を私たちが唱えるのも、その内容についての私たちの「確信」と、私たちはその内容についての証人になりますという「決意」と、その二つのことにともなう私たちの主に対する「愛」、を宣言するためなのです。そのためにはこの信条の内容を深く理解することが必要ですので、私は前回に引き続いて、この信条についての説明を書いてきたわけですが、今回の「わたしは信じます。主であり、いのちの与え主である聖霊を。」については、これが私たちの個人個人の信仰、教会の未来に関して、根本的に重要なものであることがわかっていただけたでしょうか。このことへの理解はとても大事です。なぜなら、もし聖霊のはたらきがなければ、教会自体も私たちの信仰も「死んで動かないもの」になってしまうからです。また教会の未来は、私たちがこのことを理解して、聖霊に祈り続けることにかかっているからです。もしわかっていただけたとすれば、それもやはり聖霊がその方々の方々にはたらいてくださったということだと思います。最後に祈りたいと思います。

聖霊来て下さい。あなたが4世紀のニケアとコンスタンチノーブルに集まった司教様たちにはたらきかけてつくられたものである、このニケア・コンスタンチノーブル信条を、私たちにとって「死んで動かないもの」ではなく、「生きて動くもの」にしてください。そしてそれを唱えることによって私たちの信仰を「死んで動かないもの」ではなく、「生きて動くもの」にしてください。アーメン。

(注)

*しかもこのラテン語のヴィヴィフィカンス *vivificans* (いのちの与え主) というのは、動詞ヴィヴィフィカレ *vivificare* (いのちを与える) の現在分詞といわれる形で、つまり今現在そのみわざが進行中ということを表します。つまり、死んで動かなくなっているかのようなものに、今現在、「魂」、「いのち」を吹き込み、生きて動くものにし続けておられる方だということの意味します。

(この文章は当教会の主任司祭であるインセン神父様に目を通していただいて、認可を受けているものです。)

21 世紀の信仰と教会の再建のために（その 3）

——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——

カトリック名古屋教区 平針教会典礼委員 多田哲也

今回は、ニケア・コンスタンチノーブル信条の中での、父と子と聖霊、つまり三位一体の神と「時間」と「永遠」に関するところについて考えてみたいと思います。具体的には、「主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、」と「(主は) 造られることなく生まれ、」と「聖霊は、父と子から出て、」そして信条の最後の部分の「(わたしは) 死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。」と、そこに関連した「その国は終わることがありません。」という箇所についての話です。ところで今回のこれらの箇所の説明については、前回の（その 1）と（その 2）に比べれば、さらに踏み込んだ神学的な内容について触れざるを得ないと思いますが、そのことについては、「理屈っぽいことはかんべんしてください。信仰は理屈ではないでしょう？」という声が聞こえてきそうですね（笑）。確かに神学的知識は、信仰にとって一番大切なことではないかもしれませんが、ですが特に現代のような時代、しっかりとした神学的理解の上に築き上げられた信仰を持つことが、何よりも必要なことだと思います。（その 1）でも引用した C. S. ルイスは『キリスト教の精髓』の中で、次のように言っています。「昔は教育も議論も今日ほど行われなかったのも、神に関するごくわずかの単純な観念でおそらく事が足りたのであろう。だが、今はそうはいかない。だれでも本を読むし、だれもがいろんな議論を聞いている。だから、仮りにあなたがたが神学に耳を貸さないとしても、それはあなたがたが神について何の観念も持っていないということではなく、むしろ、たくさんの間違った観念——悪い観念や混乱した観念や時代おくれの観念——を持っているということなのである。」つまり私たちが神様について考えるとき、適切な神学的理解がないと、どうしても自分たち人間についての知識などからの類推で、神様についても推し量ってしまい、その結果神様に関する「間違った観念」、「混乱した観念」を持ってしまい、それが信仰によくない影響を及ぼすことがある、ということです。このことは逆に言えば、しっかりとした「神学的理解」に基づいた信仰は、何よりも強く、ゆるぎないものになりえる、ということです。それは私たちの「頭」と「心」の両方にしっかりとした土台を持つからです。

またもうひとつ、今回の話が少しむずかしい話になるかもしれないにもかかわらず、どうしてもぜひ読んでいただきたいと私が思う理由は、「三位一体の神と『時間』と『永遠』についての話は、実は私たちの「来世の命」にかかわってくる話だからです。ある意味、私たちの信仰の根幹に関わる話です。私たち人間は、誰でもいつかはこの世での生を終えることとなります。一人の例外もありません。信仰を持たない人たちにとっては、それはただ恐ろしいだけの時であるかもしれませんが、それに対して、ニケア・コンスタンチノーブル信条の最後の箇所では「(わたしは) 来世のいのちを待ち望みます。」とあります。使徒信条で言われているように「永遠のいのちを信じます」、だけではなく、より積極的に、「待ち望みます」とされています。これは一体なぜなのでしょう？この箇所の深い意味についても、あとで考えてみたいと思います。

前置きが長くなりましたが（長すぎ？(笑)）、話を戻して、まず父と子と聖霊、つまり三位一体の神についてです。ニケア・コンスタンチノーブル信条では、御子イエス・キリストに関するところでは、「(主は)造られることなく生まれ、」とあります。これはどういうことを意味しているのでしょうか？この「生む」ことと「造る」ことの違いについて、C.S. ルイスが『キリスト教の精髓』の中でうまく説明しています。「わたしたちが『生む』時には、わたしたちは自分自身と同種類のものを生む。人間は人間の赤ん坊を生み、海狸（ビーバー）は小さなビーバーを生み、鳥はやがて小さな鳥になる卵を生む。ところが、わたしたちが何かを『造る』時、わたしたちは自分自身とは違った種類のものを造る。鳥は巣を造り、ビーバーはダムを造り、人間はラジオを造る(1)。」したがって「神が『生む』ものは神である——人間の生むものが人間であると同様に。これに反して、神が『造る』ものは神ではない——人間の造るものが人間でないと同様に。」つまりキリストは御父によって「造られ」たのではないので、私たち普通の人間のような被造物ではありません。そうではなく、御父が「生んだ」ものなので、御父と同じく神である、ということです。だからこのニケア・コンスタンチノーブル信条の「(主キリストは) 造られることなく生まれ、」というの、私が（その1）で述べたように、御子キリストは被造物ではなく、御父と同一本質の神である、ということを改めて強調しているわけです。

では次に、前の箇所にもどって、「主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、」とありますが、この「すべてに先立って」というのは何を意味するのでしょうか。「すべて」というのはここでは宇宙万物、「すべての被造物」のことです。ですから御子が御父から「すべてに先立って生まれた」というのは、御父がこの宇宙を創造された時、つまり「天地創造」の時よりも前に、御子は御父から生まれてすでに存在していた、ということを表します。イエス様の言葉「はっきり言っておく。アブラハムが生まれる前から、『わたしはある。』」（ヨハネ8・58）は、このことを意味しています。そしてもちろん聖霊に関する箇所である「聖霊は、父と子から出て」も、御子の場合と同様に「天地創造」の前のことであるのも、言うまでもないことです。ところでカトリック教会の伝統的な神学では、「時間」というものは天地創造によるこの世界、つまり被造物の誕生とともに始まったものだと考えます。（この辺から（あるいはもっと前から？）読む気が萎えてきた方もいらっしやると思いますが、大事どころなので、どうかがんばって、ゆっくり読み進めてください！）それに対して、神はその「時間」の始まるより前からおられた方、つまり時間の外におられる方で、「永遠」のうちにおられる方、と理解されます(2)。だから、「天地創造の前に御父から御子が生まれ、そして御父と御子から聖霊が発出した」、といっても、まず御父がおられて、次に御子が生まれ、そして最後に聖霊が発出した、ということが時間的順番にしたがって起こった、いうことではないのです。天地創造より前には「時間」はないので、御父から御子が生まれ、御父と御子から聖霊が発出した、というのは時間的順番を表すものではなくて、これらはすべて「時間」のない「永遠」におけるできごとであって、永遠の昔から神は常に「父と子と聖霊」、つまり三位一体の唯一の神であったということです。このことを別の点から言えば、これは「時間」の中ではなく「永遠」におけるできごとなので、「いつか昔、一度だけ子が生まれ、聖霊が発出した、ということではなく、始めもなく終わりもなく、現に今、父のうちに子が生まれ、父と子の間に聖霊が発出していることを意味します。」（山田晶『アウグスティヌス講話』講談社学術文庫）。

以上のことをまとめると、「主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、」という箇所が暗示しているのは、「父と子と聖霊、三位一体の神は『時間』の中にはおられず、『時間』を越えた『永遠』の

中におられる」、ということになります。お分かりいただけただけでしょうか。正直言って、私にはよくわかりません(笑)。私たち人間はあくまでも被造物ですので、「時間」という制約の中で生きていて、その「時間」のない、あるいは「時間」を越えた存在というのは、私たちの想像を超えたものです。だから神様についてのこういったことは、理屈としてはわかっていても、感覚的には私たち人間には理解できないことだと思います。では一体なぜ、こういったむずかしい、私たちにとって本当の意味では理解不可能なことを「信じる」ことが必要なのでしょうか。それは実は、まさにこの神がその中におられる、「時間」を越えた「永遠」こそが「天国」のことであり(ニケア・コンスタンチノーブル信条で「その国は終ることがありません」と言われているのはその意味です)、そこが私たち人間の最終的な目的地であり、故郷でもあるからです(3)。

では「神様のおられる永遠」、「天国」がそのようなものであるとして、私たち人間は、この「神様がおられる永遠」に、誰でも無条件に入ることができるのでしょうか。カトリック教会の教えでは確かに「人間の霊魂は不滅のものとして神に創造された」ということが言われています。しかしこのことは、必ずしも無条件に、私たちすべての人間の霊魂が、上に述べたような「神とともにいる永遠」、「天国」に入ることができるという意味ではありません。神を愛し、隣人を愛し、そして神のみ旨にかなう人が、そこに入ることができるのです。そしてそのためには、この世にいる間、精一杯の努力することが私たちキリスト者に求められているのです。ではもし、そのような私たちのこの世での懸命な努力が報いられて、私たちが「神とともにいる永遠」、「天国」に入ることができるとしたら、それはどういうことを意味するのでしょうか。そのことについてもう少し詳しく考えてみたいと思います。

聖パウロは、終わりの日の復活後の私たちの命、つまり神様と同じ「永遠」に入るときに与えられる私たちの「永遠のいのち」について述べています。「蒔(ま)かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときには卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。」(一コリント15・42-43)、「ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちないものとされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。」(同15・52-53)つまり本来から言えば、私たち生物としての人間の肉体は、上に述べましたように、物質的な神の被造物にすぎないので、「時間」という制約の中に生きるものであり、それゆえいつかはこの世の生を終え、滅びていくべき存在、つまり「朽ちるべき」存在です。それに対して神様は「時間」を越えた「永遠」の中に住まわれる不滅の方、「朽ちない」方です。この私たち、この世的、肉体的存在としての人間と神様との間にある、言ってみれば「絶対的な身分の違い」のようなものを、今まで話してきた「時間」にしばられた私たち被造物と、神様の「無時間性」、「永遠性」の違いを参考に、まずおわかりいただきたいと思います。その上で、あらためて次のことを理解していただきたいのです。つまり、このように「時間」に制限された、肉体を持った存在としては本来はいつか「朽ちるべき」人間(「塵にすぎないお前は塵に戻る。」創世記3・19)であるはずの私たちが、すばらしいことには、この世の生を終えたあと、またさらに終わりの日の復活の時の審判によって、もし神の命にあずかることがゆるされるならば、「神の住まわれる永遠」つまり「天国」の中に入ることになり、最終的にはあたかも、永遠に生きるものである神様ご自身と似たものになる、ということです。なんというすばらしいことだとは思いませんか。これは神様のほうから、まったく一方的に私たちに対して差し出してくださっているおめぐみなのです。聖パウロは次のように言っています。「わたした

ちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出ししながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。」(二コリント3・18)

C. S. ルイスは、上で引用した「造ること」と「生むこと」の違いに関連して、以下のようにいっています。「わたしたちは神から生まれたものではなく、ただ神によって造られたものにすぎない。われわれは、自然のままの状態においては、神の子ではなく、単なる(いわば)彫像にすぎない。」だから私たち人間が、御父である神様に向かって、「天におられる私たちの父よ」と祈ったり、「私たちは神の子です」と言ったりするのは、本当は変(?)なことなのです。今まですでに述べてきたことからお分かりのように、御子イエス・キリストには、御父に向かって「私の父よ」と呼びかけたり、「私は神の子である」という権利がありますが、実は私たちには、本来はそんな権利はないのです。私たちは御子と違って、御父から「生まれた」ものではなく、「造られた」ものにすぎないのですから。にもかかわらず、不思議なことに御子イエス・キリスト御自身が私たちに「天におられる私たちの父よ」と祈るように教えられました。これは言ってみれば、私たちは本来持っていない権利、つまり御子と同様に御父を「私たちの父よ」と呼ぶ権利を、特別なおめぐみとして与えられているということです。そしてこのことが暗示しているのは、私たちはすでにこの世でキリストのいのちに預かるものにされ、さらにこの世の生を終えたあとでは、もしみ旨(むね)であれば、本来は朽ちる肉体を持つ被造物が持つものではないはずの、「神とともにある永遠」を完全に与えられ、永遠に生きる神様ご自身と似たものにされるのということです。そして三位一体の第二のペルソナである御子が、人間となつてわれわれの中に住まわれ、十字架につけられ、復活なされたのも、私たちを、御自分と同じこの永遠のいのちに預からせるためだったのです。

このことをあらためて知ることによって、神様という方は、本当に、本当に、私たちに良くしてくださる方だ、ということがわかるのではないのでしょうか。そしてそのことは、どれほど深く神様が私たちを愛して下さっているか、ということの理解にもつながっていくのではないのでしょうか。なぜこれほどすばらしいことを、神様が私たちのようなものにしてくださるのか、ということに対する素直で素朴な驚きが、詩編8で預言的に歌われています。「あなたの天を、あなたの指の業(わざ)を / わたしは仰ぎます。 / 月も、星も、あなたが配置なされたもの。 / あなたが御心に留めてくださるとは / 人間とは何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう / あなたが顧みてくださるとは。 / 神に僅かに劣るものとして人を造り / なお、栄光と威光を冠としていただかせ . . . 」(詩編8・4—6)

この神様が私たちに差し出してくださっている「永遠」、「天国」がどのようなところであるかは、聖書の中で、さまざまな比喻をもって語られています。たとえば新約聖書の「黙示録」には次のように言われています。「神はみずから人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」(黙示録21・3—4) 私はこの箇所を読むと、十数年前にイギリスでの研究休暇から帰った時のことをよく思い出します。イギリス滞在中に目を酷使したことがたたって、日本に帰ってからかなり目の調子が悪くなってしまい、失明の恐怖におびえながら暮らしていました。仕事も同僚と同じ量をこなすこともできず、そのことを職場で責められ、本当に死にたいと思いながら暮らしていました。あまりのつらさから、「主はなぜ私をこんなにつらい目にあわされるのだろう」と思い、信仰もほとんど失いかけていました。それは高校生のときに洗礼を受けてから、私にとっては初めての経験でした。それでも、教会で主日のミサにあずかることをやめなかったのは、次のように考えたからでした。「自分自身はここでいったん信仰

を失って教会に行かなくなっても、また後で信仰を取り戻して教会に来られるかもしれない。でも私の子供たちが小さい今、親である自分が教会に行くという模範を示さないと、子供たちの信仰は一生失われてしまうかもしれない。それは親としてすべきことではない。」だからもし子供たちがいなかったら、私は教会に来るのをやめて、そのまま信仰を失っていたかもしれません。この時は、本当に自分は「信仰の薄い者」であることを思い知らされました。とにかく私という個人は、このようなことや、そのほかにも本当に苦しい思いをしたことがその前にもあとにもあります。それはこの目の不調のように、外から来たものもありますし、私自身のどうしようもない愚かさから来たものもあります。そしてそういったつらい体験は、皆さんのうち、どなたもお有りだろうと思います。耐え難い重荷を負わせられている、と感じていらっしゃる方もいらっしゃると思います。そしてそれがあある意味、誰にとっても、この世の中を生きていく、ということだと思えます。そうした中で、私たちが心に抱くのは「わたしは．．．死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。」という、ニケア・コンスタンチノーブル信条の最後の部分ではないでしょうか。私たちキリスト者はこの世でどんなつらいこと、耐え難いことがあっても、決して絶望はしてはならないものだと思います。なぜなら、どんなにつらいことがあっても、私たちには「死者の復活と来世のいのち」そして「その国は終ることがありません」という希望があるからです。つまり私たちは、この世で決して絶望したりあきらめたりしない限り、いつか神様とともにある「永遠の至福」に入ることができる、そしてそこでは神様は私たちの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださり、もはや悲しみも嘆きも労苦もない、という希望があるからです。

とはいえ、この世の中にある苦勞、艱難、悲惨さは、時に私たちが本当に耐え切れないほどのものがあることを、私たちはテレビやネットや新聞のニュースでもうかがい知ることができます。病気、犯罪、自然災害などで本当につらい目にあっている方々にとっては、文字通り「神も仏も無い」という気持ちで、絶望的状況に陥っている方もいらっしゃると思います。そして私たちもいつそういう状況に陥るかもしれませんし、今現在そういう状況にいる方にとっては、「死者の復活と来世のいのち」という希望も、虚しいものとしてしか聞こえないかもしれません。私自身、上に述べたように、本当につらいことがあって、そのせいで信仰を失いかけたことがありますので、偉そうなことをいえる立場ではないことはよくわかっているつもりです。しかしひとつ思い起こしていただきたいのは、ほかの宗教の神様についてはよくわかりませんが、私たちが信じている神様は、私たちと同じ人間になり、「罪を犯されなかったが、あらゆる点において、私たちと同様に試練に遭（あ）われた」（ヘブライ4・15）方だということです。

「マルコによる福音書」では次のようにあります。「一同がゲッセマネという所に来ると、．．．イエスはひどく恐れてもだえ始め、彼らに言われた。『わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、目を覚ましていなさい。』少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。『アッバ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。』（マルコ14・32-36）そしてさらに十字架の上ではイエス様は「『わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか』（同15・34）とも叫ばれました。これらの福音書の箇所を読むと、イエス様が完全に神であると同時に完全に人間でもあり、私たちと同じように、内面的な苦しみの極みを経験された、ということがよくわかります。これらの箇所についてイギリスの作家 G. K. チェスタトン は次のようなことを言っています。「神は（ゲッセマネにおいて）何か超人的な形において、われわれ人間の絶望

の恐怖を経験したのである。」「あの恐ろしい受難の物語には、万物の創造者が（何か人間の思議を超えた形において）、単に苦悩を経験したばかりではなく、懐疑をも経験したと感じさせるところがある。少なくともわれわれの深い情緒の反応には、明らかにそう感じさせるものがある。」また次のようにも言っています。「すべての宗教のうちキリスト教のみが、天地の創造者の徳のうちに勇気をつけ加えたのである。」およそ勇気の名に値する勇気とは、魂のまさにくず折れようとする瞬間を経験し、しかもなおくず折れぬことを意味するはずである。（『正統とは何か』春秋社）つまり神である御子イエス・キリストは私たちと同じ人間となることで、私たちと同じ肉体的苦しみにもなつて、想像を絶するような内面的苦しみも経験されました。別の言い方をすれば、（これが不思議なことですが）神である御子自身が神である御父に対する信仰を失いそうになる苦悩（「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか。」）さえ経験し、しかもその苦悩を、神であると同時に人間として、つまり「人の子」として、歯を食いしばって「勇気」をもって耐え抜いた方である、ということです。そしてだからこそイエス様は、私たちにも同じように、どんな困難やつらさがある時、それゆえ神に対する信仰を失いそうになる時でも、絶望せずに「勇気」を持つようと、私たちを励ますことができるお方だということです。私たちが絶望の淵にあるときにも、御自分で身をもって同じような絶望の淵を体験されたがゆえに、イエス様は私たちによりそって、その私たちのつらさを理解し、慰めてくださることができる方だということです。

また次のようなことも言えると思います。それは私たちがどんなに悲惨な状況にあつたとしても、私たちが信じている神様は全能の方なので、その中から必ず善（よ）いものを生み出すことができる方だ、ということです。その例として旧約聖書の「創世記」の終わりの方で、ヤコブとその十二人の息子、その中で特にヨセフ（イエス様の養父の聖ヨセフ様とは別人です）を主人公とする話があります。もしまだなじみの無い方がいらっしゃったらぜひお読みください。「創世記」の37章から45章あたりです。そして何より「御子である神の十字架上での死という恐ろしく、かつ絶望的なことから、私たち人類の救いというすばらしいものがもたらされた」ということ自体が、この人智をはるかにこえた、神様の不思議な御業のあり方を示していると思います。とにかく、私たちの神様はそのような方なので、どんなに絶望的な、恐ろしいことが私たちに降りかかってきた時にも、私たちはもうおしまいだ、と希望を捨てることなく、「主よ、あなたはどんな最悪のものの中からも、最善のものをうみ出すことができる方だと私は信じています。そのことをここに信じつつあなたに祈ります。どうか今の私を助けてください。」と私たちは祈ることができるのです。そして神様は必ず私たちのところからの祈りを聞き入れてくださいます。

以上のようなこと（1. 主はご自身の体験を通じて、必ず私たちの苦しみを理解し、はげましてくださる方であること、2. 主は最悪の中からも最善を作り出せる方であること）を決して忘れずに、こころに抱き続けられれば、私たちキリスト者はどんな悲惨な状況にあつても、神様に絶対的な信頼を寄せ、未来への希望を保つことができるのではないのでしょうか。そしてその希望のよりどころは、使徒信条にあるように「からだの復活、永遠のいのちを信じ」るだけでなく、そこからさらに踏み込んで、ニケア・コンスタンチノーブル信条にあるように「その国は終ることがありません」、そして「死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。」と力強く宣言することにあると思うのです。そして繰り返しになりますが、この「来世のいのちを待ち望みます。」という言葉が意味することは、私たちは、この世で決して絶望したりあきらめたりしない限り、いつか神様とともにある「永遠の至福」に入ることができる、そしてそこで

は神様は私たちの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださり、もはや悲しみも嘆きも労苦もない、ということをこころから信じ、そのことをこころから待ち望むことだと思うのです。私たち「小さい者」に与えられた、この神とともにある永遠の命に対する信仰と希望こそ、私たちが「死の陰（かげ）の谷」（詩編 23・4）を歩むときの、何よりのはげましであり、なぐさめであり、ともしびになると思うのです。

（注）

(1) ここで C.S. ルイスが「ラジオ」と言っているのは、この『キリスト教の精髓』が、もともとラジオ放送講演だったからで、特に深い意味はないと思います（笑）。なおこの箇所の引用は多少語句を変えています。

(2) 「時間とは何か」、という問題は多くの哲学者たちを悩ませてきた問題ですが、カトリック教会の伝統的な神学では次のように考えます。「時間」というものは神様にはなく、私たち人間も含めた被造物にだけあるものだということです。なぜならごく簡単に言えば、「時間」とは「変化」のことであり、「変化」は不完全なもの（つまりわれわれ被造物）にだけ起こるものであって、神様は完全な方なので「変化」もなく、したがって「時間」もない、ということです。だから「時間」というものは神様が「天地創造」を行い、この宇宙が作られ、被造物が現れた時に初めて生じたものなのです。

(3) 神が住まわれる「永遠」、私たちがこの世の生を終えた後、み旨（むね）であれば私たちが入ることのできるこの「永遠」というのは、今私たちが日常を生活しているこの世のこの時間のようなものが終わりなく続く、という意味ではなく（もしそうだったら、それは「天国」どころかむしろ「地獄」でしょう！）、これまで述べてきたように、もはや「時間」というものの無い、完全な至福の状態、「永遠の今」のことです。

（この文章は当教会の主任司祭であるインセン神父様に目を通していただいて、認可を受けているものです。）

21 世紀の信仰と教会の再建のために（その4）

——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——

カトリック名古屋教区 平針教会典礼委員 多田哲也

これまで（その2）では、「いのちの与え主である聖霊」について、（その3）では「三位一体の神の住まわれる永遠と私たちの来世への希望」について述べてきました。今回は（その2）で扱った聖霊と、（その3）で扱った三位一体の神について、また別の角度から考えていくことによって、ニケア・コンスタンチノーブル信条という畑の中に隠されている宝を、さらに掘り起こしていきたいと思えます。具体的には「愛の霊である聖霊のはたらき」と「三位一体の神と教会共同体」についての話です。

まず三位一体の神についてですが、「御父」と「御子」の関係については、これまでも何度も述べてきたように、ニケア・コンスタンチノーブル信条においては「主は神のひとり子、すべてに先立って父より生まれ、神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神、造られることなく生まれ、父と一体。」とあります。この箇所についての説明は（その1）および（その3）である程度以上述べたので、ここでは繰り返しません。では次に「御父と御子」と「聖霊」の関係についてはどうでしょうか。ニケア・コンスタンチノーブル信条では「聖霊は、父と子から出て」とあります。ごく短い箇所ですが、カトリック教会の歴史や神学の発展という点から見て、この箇所は実はとても重要なところなのです。4世紀にニケアとコンスタンチノーブル⁽¹⁾で開かれた公会議をもとに作られたニケア・コンスタンチノーブル信条は、もともとはギリシア語でかかれたもので、その中では実はこの箇所は「聖霊は、父から出て」とあるだけで、「と子」という言葉はありませんでした。だから今でもその伝統に忠実な東方正教会（ロシア正教会、日本ハリストス正教会など）では「聖霊は、父から出て」という言葉による信条を使い続けています（日本ハリストス正教会では聖霊のことを「聖神」と呼ぶようですが）。それに対して、使徒の頭（かしら）聖ペトロの後継者であるローマ司教（つまり教皇様のことですが）の首位権を信じる西方教会、つまり私たちのカトリック教会では、のちに「と子（これをラテン語で *filioque* フィリオ・クエと言います）」を付け加えました。これは一つには、東方正教会は「伝統を守ること」を何よりも重んじるのに対して、カトリック教会は、伝統を大切にしつつも、「隠されていた教理をよりあきらかにしていくこと」、あるいは「教理の発展」ということも同様に重んじるるところから来たものだと言えるでしょう。しかしそのことに対して東方正教会の側では「カトリック教会は勝手な改変をした。そのことは受け入れるわけにはいかない」という考えだったので、この「フィリオ・クエ問題」は、この時から現在に至るまでカトリック教会と東方正教会の一致の妨げとなる要因のひとつになっています。このように、東西の教会の分裂の大きな原因のひとつ（全てではありませんが）になるほどのことなのに、なぜそれでもあえて西方教会、つまり私たちのカトリック教会は、この「聖霊は、父と子から出て」にこだわったのでしょうか。言い換えれば、「聖霊は、父から出て」というオリジナルの、東方正教会で使われているものと、カトリック教会で使われている「聖霊は、父と子から出て」は何が違うのでしょうか。

このことに関しては、山田晶（あきら）（京都大学、南山大学などで西洋中世哲学、神学の講座を担当）による『アウグスティヌス講話』（講談社学術文庫）では次のように言われています。つまり、キリスト教の教えとしては、どちらが正しく、どちらが誤っているかの問題ではなく、どちらも正しいのだけれども、聖霊は「父から出て子を通して派遣される」と取るのと（これが東方正教会の見解です）、聖霊は「父と子の両者から出る」と取るのでは（これがカトリック教会の見解です）、実質的に何の相違もないとしても、何か力点の置き方に相違が出てくるということです。それはどういうことかということ、カトリック教会の「父と子の両者から出る」の方では、聖霊の発出において、御子キリストは御父とともにはたらいて、聖霊がそこから発出する、御父と並ぶ聖霊のもう一つの根源となる、ということが強調されている、ということです。そして、その御子が御父とともにはたらいて、聖霊を発出せしめる「はたらき」とはなにかということ、それが「愛」のはたらきなのです。つまり伝統的なカトリック教会の神学で言われて来たのは、聖霊は、御父と御子の間に生じる「愛」そのものがペルソナとなった方である(2)、ということなのです。カトリック教会が「フィリオ・クエ」を付加したことの背景には、実は他にも、当時のギリシア語圏の東方教会とは異なった、ラテン語圏の西方教会に特有の複雑な事情が色々あるのですが(3)、純粋に神学的な点から見ると、カトリック教会による「聖霊は、父と子から出て」へのこだわりは、聖霊は、御父と御子の間に生じる「愛」そのものがペルソナとなった方である、ことを強調したいがためのもの、という側面も大きかったように思えます。

聖霊は御父と御子の間に生じる「愛」そのものである方、ということはとても重要なことで、そこから派生して、多くのことを私たちに教えてくれると思います。(その2)では、聖霊がいのちの与え主であること、つまり「死んで動かないもの」に魂を吹き込み「生きて動くもの」としてくださる方である、ということを書きましたが、そうした聖霊のはたらきが、御父と御子の間の「愛」そのものである方のはたらきということになるわけです。このことはつまり、私たちがキリスト者として、「死んで動かないもの」ではなく「生きて動くもの」になるということは、とりもなおさず私たちが「神の愛の霊」によって生かされるものになる、ということの意味するのだと思います。以下そのことの一つの例を述べたいと思います。

教会は愛について多くのことを語り、聖書（特に新約聖書）では多くの箇所が愛について述べられています。「神は愛です。」（一ヨハネの手紙4・16）「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大なるものは、愛である。」（一コリント13・13）等々。キリスト教にとって「愛」がもっとも大事なことであるのは、当然過ぎるほど当然のことです。なのに、教会に属しているので、こういった言葉を散々耳にしているにもかかわらず、なぜか周りの人々への愛を全然持たずに平気でいられる、ということが起こりうるのは、不思議なことでもあるし、また恐ろしいことでもあると思います。これは実は私自身のことなのです。ここで恥を忍んで、少し私自身のことを分かち合わせていただきたいと思います。

数ヶ月前にメジュゴリエのマリア様(4)の言葉として「愛を持たないがゆえに、多くの人たちが滅びに向かっています」ということを耳にした時に、私はドキッとしました。それは自分のことだということがわかり、ぞっとしました。カトリック信者として高校生の時に洗礼を受けて30年以上になるのに、周りの人たちを愛することにおいて全然進歩がないどころかむしろ後退していることに気づかされました。電車に乗っている時、街を歩いている時、職場にいる時、知っている人、知らない人にかかわらず、自分

が周りにいる人たちに対して全然愛がないこと、あるいは愛を持とうとしていないことに気づかされました。そしてそのことが自分を滅びへの道に導いていることにも気づかされました。聖書には「どうか、主があなたがたを、お互いの愛とすべての人への愛とで、豊かに満ちあふれさせてくださいますように」（一テサロニケ3・12）とあるのに、自分が全然そういう状態にないことがわかったわけですから、私にとって、これは相当にショックなことでした。そしてかなりの自己嫌悪を引き起こすのに十分なことでした。

その時、私の妻からずっと以前に聞いたことを思い出しました。彼女は車に乗って移動する際や街を歩いている時には、周りの車の運転手たちや歩いている人たちのために必ず祈ることを習慣にしている、というのです。私はそれを聞いたときは、「ふーん」と思っただけでしたが、自分が周りに人たちに対して愛がない、と悟られた時には、「自分も同じことをしなくてはいけない」ということがわかったのです。それからは妻と同じように、電車に乗ればまず同じ車両の中の人たちをさっと見て（じろじろ見ている、というようにはならないように気をつけて、ということですが）、「神様、どうかこの人たち全てにあなたの祝福がありますように」と心の中で祈ります。街を歩いているときには、すれ違う人たち、並んで歩いている人たち、とにかく目に入る人たち全てのために「神様、どうかこの人たち全てにあなたの祝福がありますように」と祈ります。大学で授業を始める前には、教室に入って学生たちの顔を見て「神様、どうかこの学生たち全てにあなたの祝福がありますように」と祈ります。

そうするようになってから、大きな変化を感じるようになりました。それ以前は、自分の周りの人たち、特に自分が知らない人たちが、私と神様の間をさまたげる物のように感じられたのが、私がその人たちのために祈り始めてからは、今度は逆にそういった人たちを通して神様の愛が私の中に入ってくる、つまり周りの人たちが私にとって神様の愛を運んでくれるパイプのように感じられ始めたのです。これは本当におめぐみでした。この時の体験は私自身の生活全体にも大きな影響を与えてくれました。この時より前には、教会でミサにあずかる時と家で家族と祈る時以外は、神様のことを（恥ずかしいことですが）忘れていたことが多かったのが、この時以来、私の日常生活全般の中で、神様が私の周りにいる人たちの中にいらっしゃることが、愛とともに感じられるようになってきたのです。こういった体験がなければ、私はこのような文章を書いていることもなかったと思います。

もちろんこういう体験があったからといって、私が欠点だらけの人間であることには何の変わりもありません。そのことは私の家族である妻や子供たちはよく知っていることで、私にとって身近な彼らからすれば、もし私が何の進歩もない人間であれば、そのことは隠しようもないことです。だから私が本当に神様の力によって変えられて、前よりは人を愛するものに本当になれるかどうかは、私のうちにはたらかれる愛の霊としての聖霊のみわざに、今後私自身が真剣に協力するかどうかにかかっているのだと思います。そしてそのことは、皆さんのうちどなたの場合にも同じことで、何か神様が皆さん一人ひとりのうちにはたらかれる特別な体験があったとしても、それで万事めでたしというわけではないのは言うまでもないことでしょう。そうした聖霊のちからによるおめぐみをこれから生かせるかどうかは、私たち一人ひとりの決意にかかっているのだと思います。

話を戻して、聖霊が御父と御子との間に生じる愛そのものがペルソナになった方である、ということについてですが、その愛そのものである方、聖霊が私たちのうちにはたらかれることで作られるのが、本当の意味での教会共同体だ、と思うのです。なぜなら人と人を真の意味でつなぐものは愛だからです。

しかしひるがえって考えてみると、私たちの平針教会だけの話ではなく、日本の小教区の教会の一つ一つは、果たして本当の意味でどれぐらい、信仰によって結ばれた教会共同体になれているのでしょうか。皆さん一人ひとりには信仰において熱心な方々だと思います。しかしその場合、信仰はすべて個人の問題、プライベートな問題としてとらえられていて、「同じ教会の人たちと信仰を分かち合う」、と言う発想自体が、今までのカトリック教会には希薄だったように思います。これはどういうことかということ、カトリック教会の中でも、教会によっては（特に小規模な教会においては）人間関係が比較的親密なところもあるとは思いますが、そういう教会においてさえも、信者同士の自由な会話の中で、お互いの信仰について、あるいは神様への思いについて話したりする機会がなさすぎる、つまり「神様って本当にすばらしい方だよ」といった言葉が交わされることがなさすぎるのではないかと、ということです。これは現代のカトリック教会の一番弱いところなのではないでしょうか。もちろんそういったことは個人の内面に触れることなので、気楽に話せることではないかもしれませんが。またそういった会話において、「神様」という言葉を乱用することで、自分の考えに過ぎないことを「神様の考え」にすりかえて、他人を支配しようとする人が出るかもしれない、ということへの警戒感もあると思います。それでもやはり私が感じるのは、神様の御名によって集まっている人たちの間であるにもかかわらず、信仰について、あるいは神様に対するお互いの思いについて話す、分かち合う、という機会がまったくなく、という状態はとてつもないことだと思うのです。

私がこの『21世紀の信仰と教会の再建のために ——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——』を書くこと自体、私にとっての一種の「信仰の分かち合い」と言えるかと思います。そしてこれについて平針教会では何人かの方々が、私に直接感想を言ってくださいましたが、そのこと自体もその方々による「信仰の分かち合い」だと思うのです。なかでも、割合長い文章で感想を書いて、私に送ってくださった方もいます。それらの方々による「信仰の分かち合い」は、私がこうした文章を書くはげましになっただけではなく、私の信仰自体にとって大きなおめぐみになりました。そして私が書いている『21世紀の信仰と教会の再建のために ——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——』も、もし他の方々のところに触れるものがあり、信仰にとってプラスになることがあったとすれば、これはお互いが内に持っている信仰を分かち合うことで、そのちからが何倍にも増やされ力強いものになることの一つの例と言えるのではないのでしょうか。

私は以前お茶を習いにいっていたことがあるのですが、茶道では「炭手前」というものがあって、湯を沸かすための炭の扱いを稽古します。私ぐらいの世代になると、炭というものを日常で使ったことがそれまでまったくなかったので、実際に炭を使った時には、とても扱いにくい感じがしました。どういうことかということ、一つ一つの炭はガスのバーナーで火をつけても、単独でまだ冷たい灰の上におくと、熱が灰に吸い取られてすぐ火が消えてしまうのです。そんな具合で、どうやっても炭の火がすぐ消えてしまって困っていました。ところがある時、いくつかの炭を、その火のついている側を内側に向けて輪のように置くと、驚くほど火が強くなり始めるのがわかったのです。これを妻と見ていて話したのが、「本当に信仰も同じだよ。信仰の火も、ひとりの人に与えられたとしても、それをともに分かち合える人がいなければ、すぐに消えてしまうけど、分かち合う仲間がいれば、こんなに力強く燃え盛るようになるんだね」ということでした。私たち一人ひとりが内面に持っている信仰、神様に対する思いも、それが一人ひとりの内面のものとしてとどまっているうちは、まだ弱いものでいつ消えてしまうかわからないようなものですが、それがほかの人たちと分かち合うことができると、本当に力強いものになるの

です。それこそが信仰共同体としての「教会」の意味でしょう。だから「信仰を分かち合う」ということは「信仰共同体としての教会を作る」ということに等しいと思うのです。

とはいえ上に述べたように、普通の会話の中で信仰について、神様への思いについて話すということは、(プロテスタントの教会の方々はどうかわかりませんが) 私たちカトリック教会の信者は余り慣れていませんし、無理にやろうとしてもぎこちなさが伴うだろうと思われまして、またそもそも人から強制されて話すような性質のことでもないと思います。でも、もしそのように信仰について分かち合うことが、私たちの教会が本当の意味での「信仰によって結ばれた教会共同体」になるために必要なこととしたら、どのようにそれを実行したらよいのでしょうか。言い方を変えれば、どのようにすれば私たちは「信仰によって結ばれた教会共同体」を作ることができるのでしょうか。

例えば、教会の委員会や小グループで、聖書の御言葉の分かち合いをすることから始めるのも一つのいい方法だと思います。このやり方について、現在、東京教区の教区長でいらっしゃる菊地功大司教様が、神言会日本管区長でいらした時に、ここ名古屋で出された『二十一世紀を歩む教会共同体』(新世社)という本の第五章「宣教する共同体作り」で、次のようなことをおっしゃっています。少し長い箇所ですが、大事なところなので、引用させていただきます。

・・・名古屋のある教会では、教会委員会の会議の場で、話し合いをする前に必ず聖書の言葉の分かち合いをするのだそうです。最初のうちは誰も何も言わなかったのですが、何度も何度も繰り返していくうちに、だんだんといろんなことを言うようになってきました。それで、分かち合いがうまくいったなと思ったときの会議はすばらしいというのです。みんなが積極的にいろいろなことを言い合って、教会に対する思いが伝わってきて、本当に生き活きとした会議になるのです。やはり、お祈りと御言葉を中心とした共同体作りというのは、小さな委員会やグループをキリストの小共同体にしていくうえで、非常に重要なことだと思います。

私は、ある幼稚園のPTAで月に一回お話をしています。そこに参加している人の中で、信者でない方を含めて五人くらい、もっと聖書の話を知りたいと言ってきたので、隔週で私の事務所まで来てもらって聖書のお話を始めました。しかし、聖書の話はすぐ終わってしまうので、分かち合いをしてみようと思って話を始めました。最初はみんな非常にぎこちなかったですね。一年くらいたってから、やっとみんながいろいろ言うようになって、そうこうしているうちにそのうちの一人が洗礼を受けたいと言い出したのです。私は、要理をシスターにお願いして、その人に洗礼を授けました。

最初は分かち合いなど奥さん方にいやがられるかなと思っていたのですが、何度も続けていくうちに、いろんな話が出てくるようになりましたし、洗礼を受けたいという人まで出てきた。聖書の御言葉というのは、昔、語られて本に書かれた言葉だというのではなく、まさしく今生きているのだということを実感できるのは御言葉の分かち合いでしかないだろうと思います。

もちろん聖書について研究することはすごく必要ですが、バランスが大切なんですね。われわれはどちらかというと聖書を学問的に研究したりすることの方に思わず気がまわってしまうことが多いけれど、忘れてはいけないのは、神の言葉は今まさに生きている、その生きている御言葉をどうやって感じるができるかという、様々な学問的知識に基づきながらも、生きた体験あるいは生活から来る聖書の分かち合いであるだろうと思います。ですので、ぜひ教会のいろいろな委員会でも小グループでも御言葉の分かち合いをして頂けたら、非常にいい結果を生むのではないかと思います。

ています（下線筆者）。

以上のように大司教様が書かれていることは、私個人には、実感としてとてもよくわかる話なのです。私たち夫婦は上智大学の学生だったころに、こうした御言葉の分かち合いを中心とした大学での祈りのグループで信仰を育てられ、今日自分たちがあるのも、そこでの体験に負うところが大きいからです。そして現在も家族で、毎夕食後、翌日のミサの聖書の箇所を読んで分かち合いをしているからです。このことは以前に妻（多田めぐみ）が雑誌『福音宣教』（2010年4月号）で書いたことがあります。

ここで大切だと思われるのは、上の大司教様の本からの引用に下線をつけましたが、そこで言われているように、御言葉が生きたものであるということ、そしてその生きた御言葉が分かち合いという形を通して私たちのうちに確実にはたらかれる、ということです。イエス・キリスト御自身が「御言葉」と呼ばれます。その御言葉が私たちのうちにちからをもってはたらくことができるのは「愛」としての聖霊のみわざなのです。これが「御子と聖霊の共同の派遣」（『カトリック教会のカテキズム』）ということの一つの意味だと思います。だから「聖書の御言葉の分かち合い」がうまくいくためには、まずこの聖書の御言葉が聖霊のはたらきによって書かれたものであること、そしてその御言葉（イエス様ご自身）を私たちのうちに「生きたもの」にしてくださるのも、聖霊のちからによるものであることを、少なくとも分かち合いのリーダーは、はっきりと意識することが大切だと思います。そして「聖霊来て下さい、そして今から聞く御言葉を私たちに悟らせてください」と聖霊の助けを真剣に願う祈りをする必要があると思います。そして分かち合いをする他のメンバーも、御言葉を聞くときに、「聖霊はこの御言葉を通して、今私に何をおっしゃりたいのだろう」ということをも心の耳で聞こうとする姿勢が必要だと思います。そうすることで「御言葉の分かち合い」がお互いの信仰を育てあうものになり、単なる「雑談会」で終わってしまうのをふせぐことができるのではないかと思います。

ここまで書いてきたところで、たまたま「名古屋教区ニュース」の最新号（2018年12月号）の記事として、名古屋教区の「福音化養成研修会」で「分かち合い」がテーマとして取り上げられたことを読み、とてもうれしく思いました。現在名古屋教区の教区長でいらっしゃる松浦悟郎司教様による司教教書の目標に基づいてのものだとのことですが、そこで「分かち合いのルール」として5つの項目が挙げられていたことが、とても大切なことだと思われましたので、ぜひ紹介したいと思います。

- ① 立場は対等（一人ひとりが、「キリストに従う対等な信者」として話す）。
- ② 話したくないことは、無理に話さなくてもよい。
- ③ 相手の話を聞く（相手の話を遮らない。議論しない）。
- ④ 分かち合った内容は、他では話さない→相手を信頼して話す。
- ⑤ 皆が話せるように配慮する（時間など）。

具体的な「分かち合い」の仕方として、どれも非常に大事なことだと思います。上に「雑談会」にならないようにすることについて書きましたが、同様にここで言われているように、「議論」「討論会」にならないようにすることなども大切なことだと思います。

何かニケア・コンスタンチノーブル信条から話がそれていやしないか、と感じていらっしゃる方もいるかと思いますが、そうではないのです。ニケア・コンスタンチノーブル信条ではっきり宣言されているのは、私たちは、御父である神、御子である神、そして聖霊である神を信じる、ということです。そしてそ

の三者は、ペルソナとしては三つに区別されるにもかかわらず、一体であり、唯一の神、つまり三位一体の神だということです。このことは、菊地大司教様の同じ本の中の言葉で言えば、「神自身がすでに共同体である。神は父と子と聖霊との三つのペルソナを持った共同体である」ということなのです。そしてイエス様は「わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。」(ヨハネ17・22)とおっしゃいました。この「わたしたちが一つである」というのは三位一体の神の、完全な一致による共同体性を表しています。そして同じように「彼らも一つになるためです」というのは、「私たち信者たちも、三位一体のように本当の意味で一致して、「信仰によって結ばれた共同体」になることを神様は望んでおられる、ということなのです。そのことを実現するためには色々な方法があり、菊地大司教様の本にはそのほかにもいくつかのヒントが示されていますが、ここでは私自身も体験のある方法として「聖書の御言葉による分かち合い」を紹介させていただきました。

もちろんこの「聖書の御言葉による分かち合い」も、「自分はその手のことは苦手なので勘弁してください」、という方もいらっしゃるでしょうし、またこれも万能の魔法の杖ではありませんので、これをやりさえすればそれで教会共同体ができあがり、というものでもないと思います。菊地大司教様も同じ本の第四章で次のようにおっしゃっています。

・・・われわれが共通認識として持たなければいけないのは、教会や共同体の活性化というのは、決して何か決められたことをやっていけば自動的に手に入るものでは絶対はないということです。それどころか、「教会を活性化しようとか、共同体を生き活きとさせようとするのは、ものすごく大変なことなのです。」はっきりいって、そんなことはしない方が楽なんです。日曜日にミサに来るだけの方がずっと楽です。そうやって、多少気に入らないことがあっても、黙って我慢すれば、そのうちこの世の人生は終わります。・・・

信仰の活性化、共同体の活性化ということは、やりかけたら面倒なことになるんですよ、ということも共通認識として持っておくことが重要だと思います。・・・「それを覚悟して一歩前に進まなければ、われわれの宗教はただお飾りに過ぎなくなってしまいますよ、という共通認識が非常に重要なことなのです。(下線筆者)

確かに、何か新しいことを始める、ということは必ず苦勞が伴います。周りからは理解してもらえないかもしれません。また実際にやってみたとしても、すぐ目に見えてうまく行くわけではなく、そのみのりが見えてくるには時間がかかり、その間、何のためにこんなことをやっているんだろう、という無力感にさいなまれるかも知れません。私自身、『21世紀の信仰と教会の再建のために——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——』(その1)を初めて皆さんにお配りする前の夜は、こうやって苦勞して時間をかけて書いても、ただ皆さんから鬱陶しがられるだけかもしれない、という非常な不安がありました。私としては、このようなものを自分が書くことが聖霊のうながしによるものである、という確信はありましたが、「神様、それがなぜ私なのですか、他の人に書いてもらうのではだめなのですか」、というため息に似た思いはありました。そして、菊地大司教様がおっしゃっているとおり、何でこんな面倒なことを引き受けることになったのだろうか、という気持ちにさえなりました。でもこういった苦勞は、もしそれが神様の御旨であれば、必ずいつかはむくわれる時が来る、と信じています。私の場合、『21世紀の信仰と教会の再建のために』を実際にお配りして、何人かの方から好意的な感想をうかがった時は、詩編の

「涙と共に種を蒔く人は / 喜びの歌と共に刈り入れる。」(詩編 126・5) という言葉を思い出しました。ですから申し上げたいのは、聖霊が私たちの教会で「愛」の霊としてはたらかれるならば、そしてそのことに対して私たちが真剣に、かつ忍耐強く協力するならば、その御旨、つまり「信仰によって結ばれた教会共同体」を作ること、は必ず実現する、ということです。そしてそののみりは私たちの教会にとって計り知れない、大きなものになると信じています。

(注)

(1) もっと前に書くべきだったかもしれませんが、ニケアとコンスタンチノーブルというのは両方とも、現在のトルコ共和国の中にある地名です。コンスタンチノーブルというのは、現在はイスタンブールと呼ばれているトルコ最大の都市です。ニケアは現在イズニクと呼ばれている町です。

(2) 聖アウグスティヌスの『三位一体論』では次のように言われています。「それゆえ、聖霊は父と子の、それがいかなるものであれ、或る交わりである。しかも、この交わりそのものは共に実体的であり、共に永遠的である。このことが親愛 (amicitia) という言葉でふさわしくも言われ得るなら、そのように語ってもよい。しかし愛 (charitas) と語られる方が一層適切である。この愛も実体である。聖書に記されているように、神は実体であり、『神は愛である』(一ヨハネ 4. 16) から。」(アウグスティヌス 中沢宣夫訳『三位一体論』東京大学出版会)(下線筆者)

(3) 第二バチカン公会議以降のエキュメニズム(教会一致運動)推進の立場から、カトリック教会の中でも、このニケア・コンスタンチノーブル信条から「フィリオ・クエ」を削除して、東方正教会と同じ「聖霊は、父から出て」にしよう、という考えの方々もいるようです。しかしエキュメニズムそれ自体は非常にすばらしいことだとは思いますが、それと同時に私個人としては、これまでにカトリック教会が、歴史を通じて「聖霊は、父と子から出て」の上に積み上げてきた神学上の遺産も大切にしてほしい、という思いを持っています。

(4) メジュゴリエというのは旧ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナにある村の名前で、ここではルルドやファティマと同じような聖母マリア様の御出現があり、それも 1981 年から現在(2019 年)に至るまで続いていると言われている所です。今のところ、まだバチカンによって、そこでのマリア様の御出現の真実性が公式に認められているわけではありません(つまりまだ調査が継続中ということです)。しかし 2017 年末にはポーランドのヘンリク・ホセル大司教(フランシスコ教皇様からメジュゴリエの司牧状況の調査のための特使として任命された方)により、教区その他の団体が公式にメジュゴリエへの巡礼団を組織することが認可された、と発表されました。

(この文章は当教会の主任司祭であるインセン神父様に目を通していただいて、認可を受けているものです。)

21 世紀の信仰と教会の再建のために（その 5）

——ニケア・コンスタンチノーブル信条のすすめ——

カトリック名古屋教区 平針教会典礼委員 多田哲也

今回はニケア・コンスタンチノーブル信条の冒頭の部分、つまり父である神、それも万物の創造主としての御父に関する箇所について考えてみたいと思います。この箇所はさまざまな観点からの教えにかかわるところですので、この同じ箇所について、今後数回にわたって触れることになるかと思えます。

「わたしは信じます。唯一の神、全能の父、天と地、見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主を。」という言葉をもってニケア・コンスタンチノーブル信条は始まります。使徒信条の方でこの箇所に該当するところは、「天地の創造主、全能の父である神を信じます。」であり、比較してみると、全体としての趣旨はほとんど同じですが、ニケア・コンスタンチノーブル信条の方では特に、「見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主を」という言い方をすることによって、この世に存在するものはすべて父である神が造られた、ということがより強調されていると言えます。もっとも「父である神がすべてを造られた」ということは、私たちカトリック信者からすれば当たり前のことで、「だから？」という感じがするかもしれませんね（笑）。ですが、この箇所についての時代的な背景やその深い意味について考えてみると、実はこの箇所も、これまで私が述べてきた他のニケア・コンスタンチノーブル信条の箇所と同様、この現代という、信仰を守り成長させるには非常な困難がともなう時代に生きる私たちにとって、とても重要な教え、知恵を含むものであることがわかるのです。では私たちからすれば一見当たり前で単純な真理のように思える「父である神がすべてを造られた」ということを、なぜニケア・コンスタンチノーブル信条では、このように念入りに「天と地、見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主を」といった表現で言い表しているのでしょうか？

少し話がもどりますが、（その 1）で述べましたように、ニケア・コンスタンチノーブル信条が成立したことの背景として、当時の 4 世紀の教会におけるアリウス（アレイオス）派という異端の存在がありました。アリウス派は「イエス・キリストは神ではない」と主張したので、それに対しカトリック教会は正統な信仰として、御子イエス・キリストは「神よりの神、光よりの光、まことの神よりのまことの神」であるとはっきりと宣言する必要がありました。そして今回のこの、「万物の創造主としての御父」に関する部分の背景としても、実は同様に別の異端の存在があったのです。それはグノーシス派・マニ教⁽¹⁾といった名前と呼ばれる異端で、ニケア・コンスタンチノーブル信条のこの冒頭の部分は、彼らのあやまった考えに対して正統なキリスト教の信仰をはっきりと宣言したもののなのです。

ここで、千年以上も前の過去の教会についての「教会史」には自分は別に関心はないし、また今の自分の信仰とはあまり直接関係なのではないか、と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、実はそうではなくて、このあたりの問題は、現代の私たちの信仰のありかたに重要なかわりがある話なので、どうかしばらくお付き合いください。ではこのグノーシス派・マニ教という異端の教えはどのようなもの

なのでしょうか。彼らは次のように言います。「この目に見える物質の世界は、旧約聖書の神が造ったものである。しかし、実は、この旧約聖書の神は悪魔なのである。だからこの悪魔である神によって造られたこの物質的世界は悪のかたまりである。人間の肉体も、物質的なものとして、この悪魔である神が造ったものなので、その中からは貪欲、情欲、嫉妬、闘争といった悪いものが出てくる。しかし人間の霊魂は正しい神、キリストを世に送られた新約聖書の神が造ったものなので、善きものである。この正しい神は霊の世界を支配する神であり、人間の霊魂を、悪である肉体、物質から救い出すために、キリストをこの世に送りこんだのである(2)。」つまり彼らは聖パウロの書簡などをあやまって解釈し(3)、この宇宙を、「この世 — 物質、肉体 — 悪いもの — 旧約の神 — 悪魔」vs「霊の世界 — 霊 — 善いもの — 新約の神 — 善神」という図式で、徹底した霊肉=善悪の二元論で解釈しようとするのです。これは私たちカトリック信者からすれば、特に旧約聖書の神と新約聖書の神を別の存在とみなすあたり、非常に荒唐無稽に見える教えなのですが、当時3世紀から4世紀にかけてかなりの勢力を地中海世界でふるい、またさらにずっと後の時代にも中世ヨーロッパにおいては、11世紀から13世紀にかけて、特に南フランスや北イタリアでカタリ派(別名アルビ派、アルビジョワ派)という異端として、やはりかなりの勢力を持っていたものなのです。

ではなぜこういった考えの異端がはやることになったかでしょうか。いろいろな時代的な要因もありますが、ひとつにはこういった教えは、ある意味でこの世のあり方のうまい説明に、一見なっているように見えるということです。私たちキリスト者にとって大きな問題のひとつは、もし神がこの世界を創造されたのであるならば、なぜこの世界に悪が存在するのか、ということです。以下、山田晶『アウグスティヌス講話』第四話「創造と悪」からの引用です。「もしも神が世界を創造されたのであるならば、何故この世界に悪が存在するのか。これは、若きアウグスティヌスにとっての一大疑問でありました。神は最も善き方であるといわれる。善き神が悪いものを創造する筈がない。神は悪いものを創造しなかった筈である。とすれば、神の力は悪の世界には及ばないことになる。これは、神の全能に反する。逆に、神は全能である前提から出発しよう。そうすると、神は悪をも造ったことになる。これは神が善であるということに矛盾する。いずれにしましても、もし神が世界を創造したのであるならば、何故この世界に悪が存在するかという疑問が生じるのであります。」

こういう論理的な言い方をすると、なにか私たちの日常とは縁のない、抽象的な神学的議論に聞こえるかもしれませんが、実はこの「神の創造と悪」の問題は、私たちの人生にとって切実な問題なのです。

(その3)でも述べましたように、私たちは神を信じています。そしてそれと同時に、日常生活でさまざまな「悪」に苦しめられています。自分自身のおろかさという「悪」、他人からこうむるさまざまな種類の「悪」、この社会全体というものの残酷さという「悪」などによって苦しめられています。もし神がおられるのなら、なぜ私はこんなにつらい目にあわないといけないのですか、というところの叫びを發したことのある方なら((その3))で述べましたように私自身そうでした)、この「神の創造と悪」の問題は非常に切実なものであるはずです。そうした切実な疑問に対して、このグノーシス派・マニ教の霊肉=善悪の二元論は、一見うまい説明になっっているように見えるのです。つまりグノーシス派・マニ教の考えは、「この世、物質界は、もともと悪魔である神が造った悪のかたまりなのだから、その中にいる私たちの善なる魂は当然そこでは苦しみを受ける。しかし善なる神はキリストをつかわして、私たちの魂を救ってくださる」、というのですから。4～5世紀のカトリック教会の聖人である聖アウグスティヌスが、若い時にこの「悪」の問題に頭を悩ますあまり、マニ教の教えにとらえられてしまって、そこから抜け出

してカトリック教会の教えに帰依するまでに長い時間を要したのはそのためでした。

あらゆる宗教というものはそもそも、苦しみに満ちたこの世、現世からの救済を求めるものですから、どんな宗教であっても、このグノーシス派・マニ教のように、極端な現世否定、来世肯定という考えにおちいってしまう危険性が常にともなうものだと思います。かつてカルト宗教のいくつかのグループが集団自殺をするという事件がアメリカ合衆国その他の国々でありましたが、それもこうした傾向の一つのあらわれだと言えるでしょう。しかし私たちのカトリック教会の正統な教えはあくまでも、「わたしは信じます。唯一の神、全能の父、天と地、見えるもの、見えないもの、すべてのものの造り主を。」なのです。つまり霊的なものだけではなく物質的なものも、この現世のものも霊的な世界も、すべて本来「善いもの」として「善い方」である神が造られたものである、という信仰なのです。ニケア・コンスタンチノーブル信条にある「天」と「見えないもの」は同じことをさしており、霊的な世界、霊的な存在のことです。そして「地」と「見えるもの」は物質的な世界、この世の物質的な存在をさしています。そのどちらも「善いもの」として「唯一の」神が造られたものなのです。創世記のはじめ、天地創造の箇所で行われている、「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それらは極めて良かった。」（創世記1・31）は、そのことをはっきりと言っています。前にも引用したイギリスの作家 G. K. チェスタトンも次のように言っています。「カトリック哲学の第一義的にして基本的な部分が、実は生の賛美、存在の賛美、世界の創造主としての神の賛美である。」（『久遠の聖者』「聖トマス・アクィナス」春秋社）

ほかの宗教と比べてとき、キリスト教、なかでも特にカトリック教会は、霊的な存在だけではなく、物質的、肉体的な存在を、ある意味、徹底的に肯定するところに大きな特徴があると言えます。その理由は上に述べたように、霊的なものだけではなく、物質的、肉体的な存在も「善い方」である神が造られた、本来的には「善いもの」である、という信仰があるからです。そのことはカトリック教会のいろいろな面に現れています。例えば、教会には秘跡というものがあります。洗礼、堅信、聖体、ゆるし、病者の塗油、叙階、結婚の七つです。この最後の結婚について言えば、グノーシス派・マニ教では、男女の交わり自体がこの世的、肉体的なものであるがゆえに悪と考えられるので、当然結婚も悪、罪と考えられます。それに対して、カトリック教会では、結婚は、洗礼や聖体の秘跡と同じ「秘跡」というレベルに位置づけられるほど神聖なものみなされるのです。またニケア・コンスタンチノーブル信条で述べられているように、神御自身が「聖霊によっておとめマリアよりからだを受け、人となりました。」という信仰も、もしカトリック教会が物質、肉体を悪と考える立場だったとすれば、到底ありえないことだったでしょう。ほかにも例えばカトリック教会では、十字架上のキリストの立体的な像、聖母マリア様をはじめとする聖人たちの像がありますし、ステンドグラスにも意匠を凝らします。また祭壇画その他で教会の中を美しく飾ったり、教会の建物自体も、伝統的には外から見た姿も美しいものにする傾向があります。またミサの中で香を焚いたりもします。これらのことは、人間の五感（視覚、聴覚、嗅覚など）もそれ自体は「善いもの」として神から与えられたものなので、それらを通して神様に近づくことは「善いこと」である、という考えに立ったものなのです。もちろんあまり外面的なことだけにとらわれて、信仰の本質を失っては本末転倒だとは思いますが、こういったカトリック教会の特徴を、ほかの宗派のキリスト教の信者の人から「偶像崇拜的だ」とか「異教的だ」といった言葉で非難されても、決してうしろめたく感じる必要はないのです。

なかでも特に、このカトリック教会の「物質的、肉体的な存在も肯定的にとらえる」という姿勢が重要になってくるのは、「死者の体の復活」という信仰と御聖体に対する信仰にかかわるところでしょう。一般的にはほとんどの宗教から見た「死」というものにとらえかたは、人間が死ぬと霊魂は体を離れ、その霊魂が審判を受け極楽なり地獄に行く、というものでしょう。しかしカトリックの教えでは、それプラス、終わりの日の肉体の復活というものがあります。(その3)で引用しました聖パウロのことばを繰り返しますと、「蒔(ま)かれるときは朽ちるものでも、朽ちないものに復活し、蒔かれるときには卑しいものでも、輝かしいものに復活し、蒔かれるときには弱いものでも、力強いものに復活するのです。」(一コリント15・42-43)、「ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちないものとされ、わたしたちは変えられます。この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。」(同15・52-53)ということです。つまり終わりの日には私たちは、もしみ旨であれば、この世で今私たちがまとっている、この朽ちる肉体とは異なる、永遠の輝きを持った肉体をもって復活する、ということです。グノーシス派・マニ教のように、肉体は悪、霊は善、という考えではなく、カトリック教会の信仰は、私たちの肉体も霊魂も、ともに神の栄光にあずかるものになりうる、ということなのです。このことは『カトリック教会のカテキズム(4)』の1015では、次のようにすばらしい言葉で述べられています。『肉体は救いのかなめです』私たちは肉体の創造主である神を信じます。肉体を持つ人間をあがなうために受肉されたみことばを信じます。肉体の創造と、あがないの完成である肉体の復活を信じます。』

またさらに加えて、キリストは最後の晩餐で聖体の秘跡を制定されました。この世の物質であるホスチアの中に、全宇宙を作られた神御自身がおられ、それがしかも私たちの肉体の中に入って来てくださるとのこと自体もまた、私たちの肉体も含めてこの世の物質的なものが、本来的には神の創造のみわざとして、神の神聖さにあずかるものであることを示していると言えます。そして私たちがこの世にいて、この朽ちる体の中に永遠の命を持つ主の御体を拝領することは、私たちの体が、終わりの日の輝かしい肉体の復活へ向かって、つまりキリストの栄光に向かって、この世にいるうちから少しずつ近づいていくためのものであると言えるでしょう。この聖体拝領のもつ深い意味を理解し、そして信じて主の御体を受けることはとても大切なことだと思います。

しかしここで先ほどの重要な問題に話を戻しますが、いくらカトリック教会の教えが「すべてのものは、霊的なものも物質的なものも本来善である」といっても、実際にこの世の有様を見ると、それがあきらかに「悪」で満ちていることは否定できません。その「悪」のゆえに、私たちがこの世でつらい体験を重ねて苦しむのは事実であり、それだからこそ(その3)で述べたように、私たちは「死者の復活と来世のいのちを待ち望みます。」とこころからの叫びをあげるのです。ではいったいなぜ「善い方」である神が造られた本来は「善いもの」であるはずのこの世に、悪が存在するようになったのでしょうか。そしてその悪のゆえに、なぜこの世界はこんなにも悲惨な場所になってしまったのでしょうか。グノーシス派・マニ教の教えるものとは違う、カトリック教会の教えるこの質問にたいする答えはどのようなものなのでしょうか。

カトリック教会の神学では、この世に「悪、罪」が存在する根本的な理由の一つは、人間に与えられた「自由意志」にある、と考えます。といってももちろん、自由意志それ自体は、神様が人間に与えられた物なので、やはり本来は「善いもの」なのですが。神様は、他の被造物とは違う、よりすぐれた物として天使や人間を創造されました。そしてその天使や人間のすぐれた点は、自由意志を与えられてい

ることです。天使も人間も、人形のような意志を持たない存在ではなく、自分の意志を持って、自分の意志で行動を決めることのできる被造物なのです。ここでC.S. ルイスの『キリスト教の精髓』から引用すると、「神は自由意志を持ったものを創造した。自由意志を持ったものとは、間違っただけでも正しいこともできる、そういう被造物のことである。ある人たちは、自由であってしかも間違っただけの絶対できないものを想像できると考えているが、わたしにはそんなものは考えられない。善を行う自由を持つものは、かならず悪を行う自由も持っているはずである。それにまた、悪の存在を可能ならしめたのは、まさに自由意志なのである」ということなのです。つまり本来は神からのすばらしい贈り物であるはずの「自由意志」の、人間による濫用がこの世に罪と悪をもたらしたのです。繰り返しになりますが、グノーシス派・マニ教は、この世の物質的、肉体的なものはすべて悪だと考えるのに対して、カトリック教会は、それは本来は「善いもの」として神が創造されたのだけれども、そういった物質的なもの、肉体的なものがこの世界において悪になりうるのは、人間が自由意志の濫用によって、それらのものをあやまって用いるからである、と考えるのです。

C. S. ルイスはさらに次のように述べます。「だが、人びとがその自由を間違っただけ行使したらどうということになるか——神は、むろん、初めから知っていた。にもかかわらず、自由はそのような危険をあえておかすに値するものだ、と彼は考えたらしい。この点で、われわれは神に対して異議を唱えたい気がするかもしれない。」つまり神は、私たち人間が、自由意志を濫用して神にそむくという罪を犯し、神から離れてしまうことを知っていながら、人間に「善いもの」ではあるけれども、危険なものでもある「自由意志」を与えられた。そのせいでこの世の中が悲惨なものになってしまったのはいかなるものか、ということでしょう。実際に人間の過去の歴史を振り返ってみると、どの国のどの時代においても、程度の差はあっても、戦争、飢餓、政治権力による大量虐殺、多くの人々の奴隷状態、そのほかあまりにも悲惨な状態が普遍的に存在することに私たちは驚かされますし、また現代においてもそういった悲惨さは、いたるところで続いています。そういったことを考えると、本当に神が人間に「自由意志」を与えたのはいいことだったのか、と人によっては思われるかもしれません。

それに対してC.S. ルイスが言っているのは、「それではなぜ神は人間に自由意志を与えたもうたのか。その理由はこうだ——自由意志は確かに悪を可能にするが、しかしそれはまた、持つに値する愛や善や喜びを可能にしてくれる唯一のものだからである。自動人形——つまり機械のように行動する生物——の世界は、わざわざ創造するに値しないだろう。神が、自分の造った高等生物のために意図した幸福は、自由であることの幸福、愛と喜びの陶酔のうちに——これに比べたら地上の男女間のどんな恍惚的な愛も水割り牛乳にすぎない——自発的に神と他者とに結びつくことの幸福なのである。そして、そのためには、彼らはどうしても自由でなければならないのだ（下線筆者）」ということなのです。

そう、それは確かにそうなのかもしれないけれど、しかしそれにしても、この世界のあまりにも大きな悲惨さはなぜ・・・という疑問はやはり残るかもしれません。それに対しては、一つにはこういう考え方があると思います。私たちの生きるこの世の中が、はじめから善だけに満ちていて、なんの問題のないものであって、その中で神様に従って生きる、ということよりも、悪、罪といったものに満ちているこの世の中であって、あえて自由意志による自分自身の決断で、たとえ苦しみをともなうものであっても、罪を避け善をえらび神様についていこうとすることには、よりすぐれた価値と輝きがある、ということです。実際に私たちの胸を打つのは、聖マザー・テレサのように、悲惨な境遇にある人たちのために、自分の自由な意思でその悲惨な境遇に飛びこんでいって、そこにいる人々のために尽くす人たちの行いでは

ないでしょうか。

しかしこういう考えに対しても、やはり次のように感じる方もいらっしゃるかもしれません。「それもそうかもしれないけれども、そうやってこの世の悪、罪によって人間が苦しんで、その中で奮闘するのを、神様は高みの見物をして『よくやった』って、それはないんじゃないですか？」と。しかし私たちが信じている神様、キリスト教の神様は、決して私たち人間を「高みの見物」をしている方ではないのです。そこが恐らく、キリスト教の神様が、ほかの宗教の神様と一番違うところではないかと思います。キリスト教の教えでは、(その1)、(その3)で述べましたように、神様ご自身が人間になってこの世のただ中にこられました。そしてありとあらゆる種類のこの世の悪、人間の罪のせいで苦しみを受けられました。馬小屋の中で生まれるというかたちで、人間社会の冷たさを経験されました。そうして生まれたすぐ後で、ヘロデ王という権力者からあやうく殺されそうになり、人間というもののエゴイズムからくる残酷さを経験されました。そして成人して公生活に入られた後でも、何度も人々から理解されずに殺されそうになったり、あざけりを受けたりして、そしてこの世での生涯の終わりには、想像を絶する肉体的、精神的苦しみを受け、そして十字架の上で殺されました。このことがあらわしているのは、私たち人間が、上に述べたように、悪、罪といったものに満ちているこの世の中にあって、あえて自由意志による自分自身の決断で、たとえ苦しみをともなうことであっても、悪、罪ではなく、善をえらび神様についていかななくてはいけない、ということ、を、神様ご自身が身を持って模範を示してくださった、ということではないでしょうか。聖クララ会の修道女、シスター・ブリージ・マッケナ(5)は次のように言っています。「私たちがどれほど罪と闘わなければならないかを考えるとき、私は、しばしば、カルワリオに向かって歩いていらっしゃるイエスのことを思い出します。イエスは何度も倒れられましたが、そのつど立ち上がられました。そのときのイエスのように、私たちは、聖性のために絶えず闘い続けるよう、呼びかけられているのです。聖性のために闘い続けるということは、『自分は弱くてまた罪をおかすものであるとわかっている、それでもなお、カルワリオに向かうイエスのように、再び立ち上がって、前に進んでいかなければならない』、と自分に言い聞かせることなのです。」(筆者訳) (Briege McKenna, O.S.C. 『 Miracles Do Happen 』 Servant Books) (6)

(その1)、(その3)でも繰り返し述べましたが、この「神御自身の受肉」、つまり「この世に実在したナザレのイエスという方は人間であると同時に神である」と信じることは、私たちキリスト者にとって、さまざまな面から見て、決定的に重要な教えだということが、この点からもよくわかるのではないのでしょうか。イエス・キリストのこの地上での生涯を思ってみるとき、私たちの神様は、私たち人間に対して無関心でもないし、また見下しておられる方でもない、ということがよくわかると思います。神様は、この世に生きる私たちの悲惨さのただ中に、私たちと同じ人間として飛びこんでこられ、私たちの悲しみや苦しみを、私たちとともに生きてくださる方である、ということなのです。それは(その1)でも述べましたように、ひとえに神様が私たちが本当に愛してくださっているからなのです。なぜこの宇宙万物を造られた全能の神が、その被造物に過ぎない私たち人間を、そこまでして愛してくださるのでしょうか。なぜ私たち人間のためにそこまでして下さるのでしょうか。

神様の私たち人間に対する深い愛を完全に理解することは、私たち人間には不可能だと思いますが、それでも少しでもそれを理解するための助けとなるからでしょう、神様と私たち人間のあいだにかわされる愛は、男女のあいだの愛によくたとえられています。たとえば旧約聖書の「雅歌」や、16世紀スペインのカルメル会の聖人、十字架の聖ヨハネによって書かれた詩「霊の賛歌」、「牧童」などですが、こうい

ったものを読んでわかるのは、神様は（もったいなくも）私たち人間に魅了され、言ってみれば、私たち人間に対して恋におちてくださった、ということです。「霊の賛歌」第31、32の歌は、人間の魂をあらわす「花よめ」が、神様をあらわす「花むこ」に向かって歌っている美しい箇所ですが、次のようなものです。「私のうなじにゆらぐ ひとすじの髪の毛、/あなたはそれをお眺めになりました。/私のうなじの上に それを眺めて/あなたの心は捕われました。 /・・・あなたが私を眺めていられたとき/あなたの目は私の上に/あなたの美しさを刻みました/これがためにこそ、あなたは私を熱愛され/それによって私の目は/あなたのうちに見たものを/拝する恵みにふさわしくなりました。（下線筆者）」（十字架の聖ヨハネ『霊の賛歌』ドン・ボスコ社）この詩句についての聖人自身の注解をここに載せられないのが残念ですが、ここで十字架の聖ヨハネが言っていることは、神様は、私たち人間に魅了され、私たち人間に対する愛によってみずからが捕われることをお望みになられた、ということなのです。そして神様が私たち人間を熱愛しているそのあかしが、痛ましいキリストの十字架上のすがたなのです。十字架の聖ヨハネによるもう一つの詩「牧童」では、イエス・キリストは「牧童」にたとえられ、私たち人間の魂は「羊飼いの少女」にたとえられています。「一人ぼっちで 牧童の、心は痛む、/歓びとも みち足りた心とも 縁なく、/羊飼いの少女を想い、/愛に 胸を 痛めぬいて。 /・・・/美しい羊飼いの少女に 忘れられているとの思いがあればこそ、/異郷で、深い痛みを 心に/手荒く 虐げられるにまかせている、/愛に 胸を 痛めぬいて。 /・・・ /長い道程（みちのり）の果てに、彼は木の上へのぼり、/その美しい腕を 開いて、/木にかけられたまま、死んでいた、/愛に 胸を 痛めぬいて。（下線筆者）」（『十字架の聖ヨハネ詩集』ドン・ボスコ社）

「神様が人間への愛に捕われてしまった」こと、しかし「私たち人間はその神様の自分たちへの愛を忘れてしまっていること」について思うとき、私は昔見たディズニーの古いアニメーション映画、「眠れる森の美女」を思い出します。ご存知のように、オーロラ姫は糸車の針に指をさし、魔法の呪いにかかって眠りについていました。私には、このオーロラ姫の「眠り」というのは、悪魔の呪いによって、自分を愛してくださっている神様のことも何もわからなくなってしまう私たち人間のことをあらわしているように思えるのです。それに対してイエス・キリストであるフィリップ王子は、自分の身の危険もかえりみずに、命がけで魔法に立ち向かっていき、愛する者としてのくちづけをオーロラ姫に与え、姫を魔法（つまり悪魔）の呪いから救い出すのです。そしてこのことはすべてフィリップ王子（つまりイエス・キリスト）がオーロラ姫（つまり私たち人間）に対して恋におちてしまったがゆえに、なのです。ニケア・コンスタンチノーブル信条には「主は、わたしたち人類のため、わたしたちの救いのために天からくだり」という箇所がありますが、この箇所を唱えると私は、イエス様があたかも「眠れる森の美女」のフィリップ王子のように、オーロラ姫のごとく呪いをかけられた私たち人類の救いのために、命がけで天からこの世にかけつけてくださったんだなあ、と思わされるのです。そして王子のくちづけのように、聖霊のはたらきかけによって、まずキリストの愛が私たちの上にそそがれると、私たちへの呪い、つまり愛する主キリストのことも何もわからなくなっている、という状態がとけ、私たちのうちにも主への愛がめざめ、それが私たち自身の「呪いである眠りからの目覚め」になるのです。

ここで「眠れる森の美女」というひとつの物語から、キリストの救いのわざについて考えてみたわけですが、私たちキリスト者にとって、そもそもこの現実の世界はひとつの大きな物語のようなものとみなせるかもしれません。評論家の江藤淳という人は次のようなことを言っています。「大多数の人間は、

みな自分についての夢、あるいは物語を持ちながら生きています。ここにお集まりの皆さん方も、私もやはりそうです（これは講演でした 筆者注）。それは皆さんが私小説をお書きになるということでもなければ、日記をつけるということでもない。自分の生がはじまり、やがて死ぬあいだの過程を意味づけたいという気持ちから、自分についての夢や物語が必要になってくるという意味です。」（『批評家の気儘な散歩』新潮選書「自己、その生と死と永世と」）つまり私たちが、自分の人生の中に独自の「物語」を持ちたいと願うことは、私たちの人生が、何か「意味」を持ったものであって欲しいと願うことなのです。そしてその「意味」なしには、私たち人間は、本来生きられないものなのです。私たちがキリスト教の教えを信じ、その教えに生きるということは、地上に人間としてこられた神御自身を主人公とする壮大な物語の、もう一人の主人公に私たちひとりひとりがなる、ということではないでしょうか。そしてそれこそが私たちの人生に、真の「意味」をもたらしてくれる、つまり私たちが自分たちの人生を、生きる価値のあるものだと思えることを可能にしてくれる、と思うのです。この物語の二人の主人公のうち、一人は他の一人への愛のために命を投げ出されました。どうしてもう一人の主人公である私たちも、その方を愛せずにいられるでしょうか。こうして、この世界という物語の中の二人の主人公、「神」と「私たちひとりひとり」が互いに愛し合うようになることこそが、私たちがこの世に生をうけた真の「意味」なのではないでしょうか。

（注）

(1) グノーシス派はグノーシス主義ともいわれるもので、1世紀の初代教会のころから存在した異端です。すでに新約聖書の使徒たちによる書簡や『ヨハネの黙示録』にもあやまった教えとして言及されています（「グノーシス派」という名前は使われていませんが）。マニ教は3世紀にペルシア（現在のイラン）で起こった宗教で、キリスト教とは別の宗教とも解釈できますが、教義の中にキリスト教の教えを取り込んでおり、また教えの内容はグノーシス主義の一つのあらわれと考えられるので、実質的にはキリスト教のグノーシス派の異端とみなしうるものです。

(2) このグノーシス派・マニ教の教えのまとめは、山田晶『アウグスティヌス講話』（講談社学術文庫）第4章「創造と悪」からのものです。

(3) たとえば「ローマの信徒への手紙」8章1～17節など

(4) この『カトリック教会のカテキズム』は聖ヨハネ・パウロ2世教皇によって任命された編纂委員会によって1992年に出版されたものです。

(5) シスター・ブリージ・マッケナはアイルランド出身で、世界中で司祭のための黙想会の指導などで活躍していらっしゃる方です。来日されたこともあります。

(6) ここでは筆者自身の訳で引用しましたが、このシスター・ブリージの本は、『祈り —— 恵みの泉 ——

一』(カトリック・ファミリーセンター) という題で日本語訳が出ています。

(この文章は当教会の主任司祭であるインセン神父様に目を通していただき、認可を受けているものです。)